

# 「東亜病夫」と近代中国（1896–1949）

高 嶋 航

はじめに	369
I 清末の「病夫」言説	376
II 北京政府時代の「病夫」言説	386
III 南京政府時代の「病夫」言説	401
おわりに	415

## はじめに

---

「東亜病夫」という言葉は、それが2008年の北京オリンピックの前後に盛んに使われたことが示すように、現在では体育・スポーツと密接に結びついている。実際、1949年から2014年の『人民日報』の統計をとってみると、「東亜病夫」の半数以上が体育・スポーツに関する記事のなかで用いられている。また、現在の中国人にとっては、たとえば百度百科に示されるように、武術のイメージ（とりわけ映画『精武門』で李小竜演じる陳真が「東亜病夫」と記された額を破壊する場面）を想起させる言葉でもある<sup>(1)</sup>。

「東亜病夫」については楊瑞松が東西の文献を渉猟して、興味深い議論を展開している<sup>(2)</sup>。楊は現在の「東亜病夫」イメージを過去に投影する研究を批判し、「東亜病夫」の歴史性を指摘し、その歴史化（historicise）を試みた。「東亜病夫」（当初は「東方病夫」と訳される）は、梁啓超が主筆をつとめる『時務報』10冊（1896年11月5日）に見えるのが最初の用例である。当時の「東亜病夫」は西洋で存亡の危機にある中国を指す言葉であったが、中国人はそれを自らに対する侮辱としてとらえるのではなく、むしろ変法を鼓吹する根拠として受け取った。1903年に梁啓超は「論尚武」と題する文章で「病夫」と中国の国民の身体を結びつけ、その意味を「創造転化」させた。西洋の東方に対する言説やイメージが、中国人によって権威あるものとして流用され、西洋とは異なる文脈（＝東方）で再

現される (re-presented) 現象を、楊はディルリキにならって「自我東方化 (self-orientalization)」と呼ぶ<sup>(3)</sup>。そして、1905年に曾樸が「東亜病夫」のペンネームで『孽海花』を発表し、わずか1、2年で5万部をこえるベストセラーとなったことで、「東亜病夫」は「公共輿論圏」に入り、以後百年にわたりだれもが知る言葉となった。このように、楊は西洋の概念である「東方病夫」と中国化した「東亜病夫」を区別し、その変化を跡づけることで「東亜病夫」を歴史化することに成功した。

これに対して、拙稿「東亜病夫」とスポーツ」(以下、前稿と略す)は、「東亜病夫」をジェンダーの問題としてとらえ、コロニアル・マスキュリニティの議論を援用してその起源を考察した<sup>(4)</sup>。ただ、この論文の主眼は中国におけるスポーツの受容にあって、「東亜病夫」自体については十分に検討することができなかった。とりわけ、言葉づかいの問題、すなわち、清末の資料の多くが「病夫」か「東方病夫」であり、「東亜病夫」がいつどのようにこれらに取って代わったのかという問いは今後の課題とせざるをえなかった。その後、「病夫」に関する資料を見るなかで、言葉そのものの変化よりも、言葉をめぐる社会的文脈(だれがだれに対してこの言葉を用い、そこになにを託し、なにを伝えようとしたのか。さらにこの言葉が社会でどのように受けとめられたのか)の変化に注意するようになった。「病夫」「東方病夫」「東亜病夫」をめぐる社会的文脈をここでは「病夫」言説と呼んでおく<sup>(5)</sup>。前稿に照らしていえば、「病夫」言説は、近代中国における否定的ネーション像の一つであり、中国人は男性性が欠如しているという自己認識を示していた。この認識は、必然的に、男性性が欠如していないのはどういう状態であり、自分たちがそのようになるにはどうすればいいかという問題意識を伴っていた。つまり「病夫」言説は表面的には自己の女性化を語りながら、男性性を回復しようとする意志(再男性化への意志)を併せ持っていた。目指すべきネーションがどのようなものであるのかによって、「病夫」言説をめぐる社会的文脈はおのずと違ってくる。とすれば、清末の「病夫」言説と現在の「病夫」言説には大きな違いがあるのではないか。

このような視点から改めて楊論文を読んでもみると、中国化した「東方病夫」と現在の「東亜病夫」のつながりが不明瞭であることがわかる。楊は、ナショナリズムの高まりとともに、「東亜病夫」は西洋人が中国人の身体を貶め、その尊厳を辱めるために中国人にむりやり押しつけたレッテル(帽子)になったと指摘するが、その事例として1970年代の『精武門』を挙げるのみで、踏み込んだ分析はなされていない。清末の「東方病夫」が現在の「東亜病夫」に変化する転機とされるナショナリズムの高まりとは具体的になにを指すのだろうか。

本研究は「東亜病夫」が定着したとされる20世紀初頭から現在までの「東亜病夫」を歴

史化することを目指す、本稿はその第一段階として、清末から中華人民共和国成立までの時期を対象とする。具体的には、第1章で清末（1896-1911）、第2章で北京政府時期（1912-1927）、第3章で南京政府時期（1928-1949）の「病夫」言説を検討し、その変化をたどる。

本稿ではそれぞれの時期の多様な資料を考察するのに加え、『申報』のデータベースを活用して、数量的分析をおこなう<sup>(6)</sup>。データベースは「新聞庫」「副刊庫」「広告庫」に分かれているが、本稿では前2者を記事、「広告庫」を広告として扱う<sup>(7)</sup>。詳細な分析は本文に譲るとして、ここでは全体的な状況を概観しておこう。表1は、「東方病夫」「東亜病夫」の記事と広告の件数をグラフ化したものである。本稿で分析対象とする『申報』の「東方病夫」は記事が92件、広告が33種396件、「東亜病夫」は記事が268件、広告が50種730件ある<sup>(8)</sup>。表1から、前半は広告、後半は記事が多数を占めることが見て取れよう。「東方病夫」「東亜病夫」それぞれの記事の件数を積算しグラフ化したのが表2である。前半に「東方病夫」が多いこと、1928年から1936年がピークであることがわかる。表3は表2と同じデータを用い、「東方病夫」「東亜病夫」それぞれの件数の推移を示した。この表から1928年以降は圧倒的に「東亜病夫」の件数が多いことが読み取れる。前稿で提示した疑問の一つ、「病夫」「東方病夫」がいつから「東亜病夫」になったのかは、表3から解決されよう。ちなみに『人民日報』の場合、2014年までで「東方病夫」が4件、「東亜病夫」が224件となっており、「東方病夫」はほとんど使われていない<sup>(9)</sup>。

件数に加えて本稿では「病夫」言説が用いられる文脈、言い換えれば、再男性化の手段

表1 「東方病夫」「東亜病夫」記事・広告件数

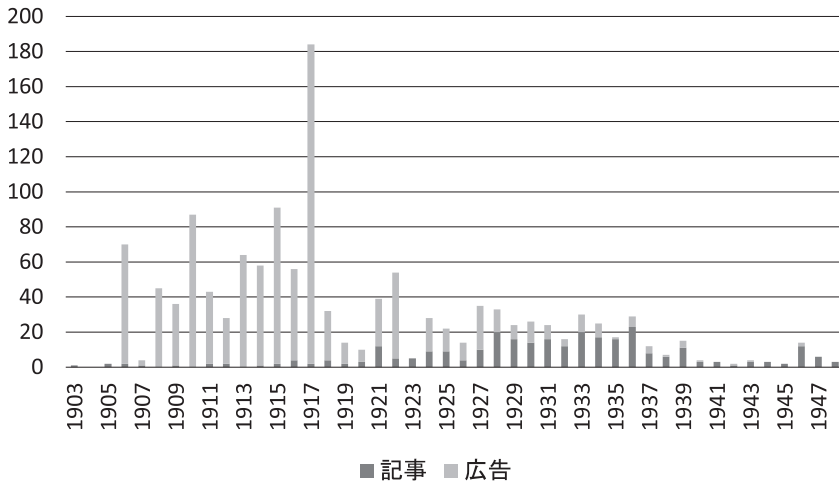


表2 「東方病夫」「東亜病夫」記事数累計

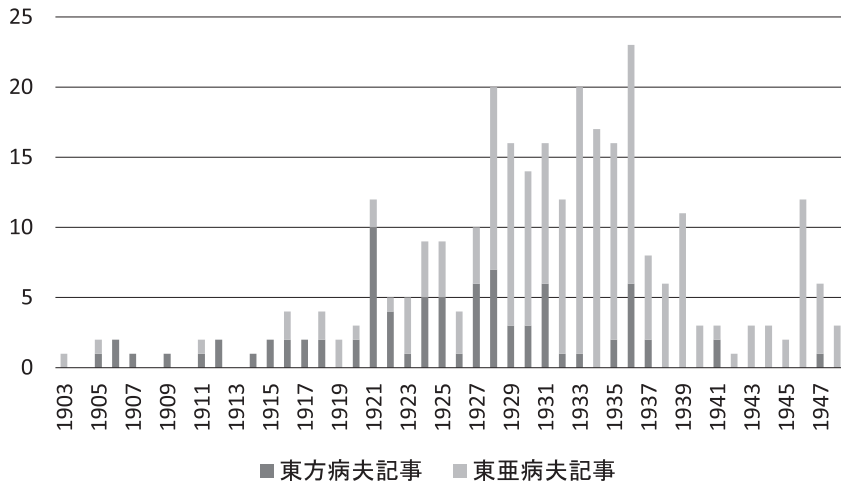
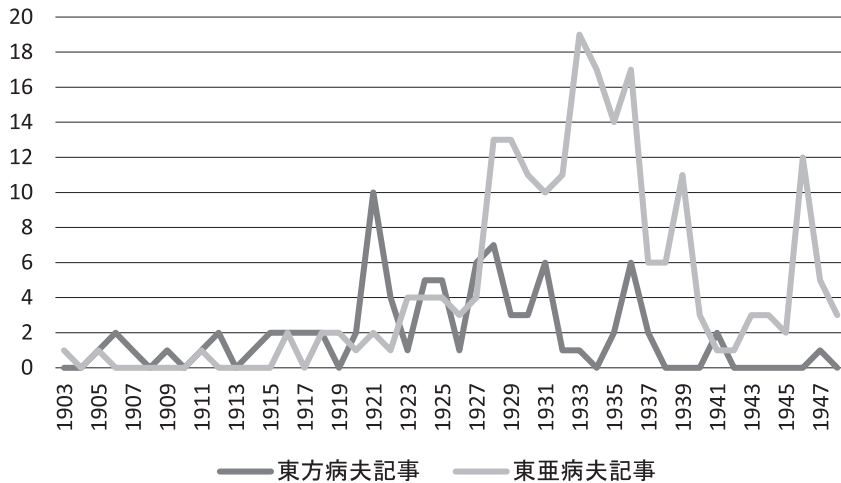
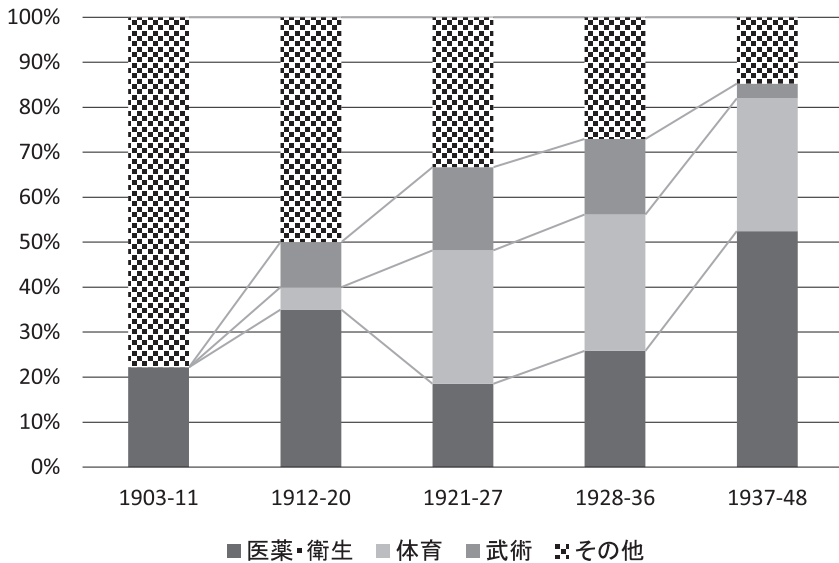


表3 「東方病夫」「東亜病夫」記事数比較



に着目する。作業段階では医薬・衛生、体育、武術、軍事、経済、政治、文化、国民性、国際情勢、人名、その他、に分類した<sup>(10)</sup>。このうち人名は「病夫」言説とはいえないので、基本的には分析対象から外した。残りの項目のうち、医薬・衛生 (29.3%)、体育 (26.4%)、武術 (12.9%) の3項目で全体の68.5%を占める。本稿では、いずれも身体に関わるこれら3項目を主たる分析対象とする。表4は清末 (1903-1911)、北京政府時期 (1912-1920と1921-1927)、南京政府時期 (1928-1937と1938-1948) について、「東方病夫」「東亜病夫」

表4 「東方病夫」「東亜病夫」記事年次別内容



が用いられる文脈の内訳を示している。おおまかな趨勢として、医薬・衛生、体育、武術の3項目の割合が上昇する（＝その他が減少する）ことが読み取れよう。詳細な分析は本論に委ねるが、ここまでの初歩的な分析だけでも、「病夫」言説が質量ともに一定不変のものでなかったこと、すなわちその歴史性は明らかとなる。

本論に移る前に、「病夫」言説がなぜ「病人」「病者」ではなく、また「病婦」でもなかったのかという問題に触れておきたい。ジェンダーの問題は前稿でも論じたが、その後を得た知見を加えてもう一度整理しておく。

19世紀から20世紀初にかけてのいわゆる新帝国主義の時代、世界が西洋列強によって分割され、西洋／非西洋の支配／被支配関係が広がっていった。社会進化論は弱肉強食、優勝劣敗の観点から帝国主義列強による植民地化を歴史の必然として正当化した。強さや優秀さはしばしば男らしさと結びつけられた。たとえば、1860年にあるイギリス人が「ネーションは決して静止したままではない。ネーションはいつも進歩するか後退するかしている。もしネーションが男らしければ(manly)、完全なる文明への歩みは確実であるが、……もし男らしくなければ(unmanly)、後退は急速ですさまじい<sup>(11)</sup>」と論じたのはその一例である。これを植民地主義に当てはめると、強者・支配者・西洋が男らしさに、弱者・被支配者・非西洋が男らしさの欠如、もしくは女らしさに結びつけられる。被植民地化は去勢、もしくは女性化を意味し、被植民者はさまざまな形で男らしさを回復しようとする（再男性化）。逆に植民者は被植民者を去勢、女性化することで、自らの男らしさを維持

する。植民地主義をめぐる男性性のせめぎ合いはコロニアル・マスキュリニティと呼ばれる<sup>(12)</sup>。

強者と弱者の間で展開される男性性のせめぎ合いは、なにも植民地だけに起こるものでもないし、新帝国主義の時代に限られるわけでもない（清朝における満洲族と漢族の関係はその一例である）。それがネイションと結びついている点こそ、この時代のコロニアル・マスキュリニティの特徴であろう。そもそも、人類共通の普遍的な男らしさというものも存在しない。ある男らしさによって得られる名誉と、それを失うことで強いられる恥辱の及ぶ範囲には、一定の限界がある。言い換えれば、同じ男性性を共有する範囲でしか、名誉や恥辱は生じない。その範囲はおおむねなんらかの集団と一致するが、コロニアル・マスキュリニティの場合はネイションと一致することが多い。こうして男性性はネイション全体の名誉と恥辱の問題となり、被植民地化にともなう去勢や女性化はネイション全体の去勢、あるいは女性化をして受け取られる。再男性化の過程で目指すべき理想の男性性は、しばしばインド人らしさ、中国人らしさなど国民性に置きかえられた。

一例を挙げよう。械闘は明清時代の華中、華南で見られた村落間の闘争である。械闘は時代的にも地理的にも限定されたもので、その名誉と恥辱の及ぶ範囲は往々にして当該村落の外に出ることはない。しかし梁啓超はそれを明清時代の広東人や福建人の問題ではなく、中国人の通時的な国民性の問題としてとらえた。械闘は賭博やアヘンとならぶ悪習でありながら、いっぽうで中国人の「武士道」の兆しでもあった<sup>(13)</sup>。彼らの「尚武精神」の焦点を村落からネイションに移し、「公戦に勇にして、私闘に怯」（『史記』商君）にすることができれば、中国は滅亡の危機を逃れることができるはずだった。梁が械闘に尚武精神を見出したのに対して、孫文はそこに「一盤散沙」（団結心の欠如）を克服する鍵を見出した。宗族にたいする忠誠心をネイション（国族）へ拡大させることができないか、と孫は考えたのである<sup>(14)</sup>。国民性の欠陥の認識は、望ましい国民性の認識とセットであり、また国民性の欠陥は絶望の証ではなく、希望の表明でもあったことに注意したい。

では新帝国主義の時代に被植民者が理想視した男性性とはなんだったのか。一言で言えば、力強さ、とりわけ軍事的身体的な力の希求であった<sup>(15)</sup>。進化論は世界を生存競争、弱肉強食の舞台に変え、力強い男性性に至上の価値を付与した。男性性はミリタリズムと結びつくだけでなく、ネイションがその単位となることで、ナショナリズム、ひいては帝国主義、植民地主義とも強く結びつくことになった<sup>(16)</sup>。モッセはナショナリズムを西洋の近代的男性性と並行して誕生し進化した運動であったと述べる<sup>(17)</sup>。バネルジーはこれを「筋肉のナショナリズム」と呼んだ。筋肉のナショナリズムは、ネイションのために命を捧げることを厭わない武装化された男性性（勇敢で規律化された男性の身体として表象さ

れる）と結びついた英雄的な市民＝兵を要求した。このような力強い男性性を前に「サル化したケルト人（simianized Celt）」「男らしくないベンガル人（effeminate Bengali）」というレッテルを貼られたアイルランドやインドの人びとは、イギリスの「筋肉的キリスト教」に対抗して、「筋肉的ゲール人（Muscular Gael）」「男性的ヒンドゥー教（Masculine Hinduism）」という新しい男性性を構築し、再男性化を図った<sup>(18)</sup>。新しい男性性を求めたのは、支配者の男性性のもとでは、アイルランド人やインド人は永遠に女性化されるのを免れないからである。ただし、被支配者の男性性は支配者の男性性から無縁でいることはできない。それどころか、支配者の男性性に認められないかぎり、それは対抗物としての意味を持たない。アイルランド人はゲール人体育協会を組織して、伝統スポーツを振興し、イギリスとの武力闘争にのぞんだ。インド人はサッカー、クリケット、ホッケーなどのスポーツでイギリス人チームを破り、男らしさを証明した<sup>(19)</sup>。個人の再男性化は、自治や独立を通じて国際社会からネイションとして承認されることを目指す運動、すなわちネイションの再男性化と密接につながっていた<sup>(20)</sup>。

中国の場合、これほど単純な図は描けない。アイルランドやインドにとってのイギリスのような、明確な敵がいなかったからである。明確な敵の不在は、それに対抗して構築されるべき男性性をも曖昧にした<sup>(21)</sup>。たとえば梁啓超は『中国之武士道』で力強い孔子を提示したものの、広い支持は得られなかった。その後の五四新文化運動で孔子は打倒対象にさえなった。漢族の祖先である黄帝は具体的イメージに乏しかった。近代中国において覇権の男性性を同定することは難しい。複数の列強による侵略を受けた点は日本も同様であったが、日本は早い時期に對外戦争の勝利や不平等条約の改正によって、ネイションを誇りの共同体に転換することに成功した。これに対して、近代中国はネイションを結集しうるような対外的成功を収めることに失敗した。明確な敵がなく、誇りとなるような対外的成功の可能性すらないなかでネイションを構築せざるをえなかった近代中国は、恥辱やトラウマ、被害者としての経験を通して、四億の「バラバラの砂」を一つのネイションに結集させようとした。中国ナショナリズムのこうした特徴は、すでにさまざまな形で論じられており、たとえばキャラハンは「悲観・楽観主義的ネイション」、汪錚は「選民意識＝神話＝トラウマ・コンプレックス」、石静遠は「失敗」という概念で分析している<sup>(22)</sup>。また、楊瑞松もグリーズやコーエンを引きつつ、「被害者ナラティブ」の一つとして「東亜病夫」をとらえている。

興味深いのは現代を論じるキャラハンと汪が「楽観」「選民」のような肯定的自画像を重要な要素として取り上げるのに対して、1949年以前を対象とする石がもっぱら否定的自画像に焦点を当てていることである。石によれば、「失敗」は勝利に依存することなくネイ

ションの形成を可能とし、被害者化は「文化的自己認識の最も生産的で最も普遍的な様式」となった。アイデンティティとしてのネーションは、最も説得的な表現を否定のなかに見出し、誇りよりも負傷の、充足よりも欠如の感覚がナショナリズムの原動力となった<sup>(23)</sup>。近代中国が経験したさまざまな負傷や失敗は、ネーションの恥辱(国恥)に読み替えられ、そのたびに人びとにネーションの存在(もしくは不在)を意識させ、ネーション建設の情熱を煽り立てたのである。すなわち、「病夫」言説は中国を被害者化し、恥辱を原動力に変えてネーション形成を実現するための否定的な自画像の一つであった。

上記の研究は触れないが、これはジェンダーの問題として考えることができる。「病夫」言説は辮髪、アヘン、不平等条約のような個々の出来事の記憶を、恥辱という糸で結び合わせ、軍国民(先述の英雄的な市民=兵の中国版)からなる富国強兵の独立国家という希望を紡ぎ出していた。それは、まさしくエンローの言うような「男性化された記憶、男性化された恥辱、男性化された希望」であった<sup>(24)</sup>。女性はこれらの記憶、恥辱、希望から排除されるか、間接的にしか関与できなかった。中国のナショナリズムは、西洋の家父長的で軍事的で男性的なナショナリズムと共犯関係にあったのであり、「病夫」言説はこの二つの男性的ナショナリズムのせめぎ合いから生まれた。「病夫」が男性形であるのは、いわば必然的だった。ここで注意したいのは、男性性は関係概念であり、本質的なものではないことである。西洋によって去勢、女性化された(と考える)中国の知識人たちは、国民に向けて「病夫」言説を語ることで、自らを男性化することができたのである。

以上から、「病夫」言説の射程が、アイデンティティ、ジェンダー、国民形成など近代中国を通底する諸問題に及ぶことが理解されよう。「東方病夫」の言葉が現れてから百年以上たち、富国強兵を実現して大国となったはずの現在の中国において、なお「病夫」言説が用い続けられていることを考えれば、近現代中国にとってそれがいかに重要であったかがわかるはずである。現代の「東亜病夫」がどのようにして形成されてきたのか、その百年あまりの歴史の前半について論じていこう。

## I 清末の「病夫」言説

### 1 「病夫」の起源

楊瑞松は国家を指す「病夫」と身体を指す「病夫」を区別し、前者の「病夫」は西洋人が国家としての中国に貼ったレッテル、後者の「病夫」は前者を受けて中国人が想像した自己の身体に関する認識で、「中国是東方病夫」から「中国是東方病夫之国」への変化に、西洋の比喩的用法からの「創造転化」の過程を見出した<sup>(25)</sup>。筆者(高嶋)は前稿でこの枠



組みに依拠して「東亜病夫」の起源を考察したが、今回「病夫」言説を再検討してみて、「病夫」そのものが国家を指すか身体を指すかという問いは重要ではないと考えるにいたった。そもそも「東方病夫之国」という表現は、「東方病夫で構成される国」を意味する場合もあれば、「東方病夫である／と呼ばれる国」を意味する場合もあり、またたんに中国の別称として用いられる場合もある。実際の用例では、「病夫」が中国を指すのか、中国人（の身体）を指すのか判断できないものも少なくない。後掲の「論青年会体操班事」などは身体鍛錬を唱える文脈で用いられているが、「病夫」が指すのは国としての中国である。

そこで本稿では「病夫」言説の文脈に注目して議論を進める。「論青年会体操班事」のように身体の文脈で「病夫」が使われる事例のうち最も早いものとして張之洞の「戒纏足会章程叙」（1897年）を挙げることができる。ただし、この文章は西洋の「sick man」を意識したものではない。楊が指摘し、前稿でも論じたように、梁啓超の「新民説 論尚武」（1903年）が身体性を帯びた「病夫」言説の嚆矢であろう。本節では、楊論文と前稿を補う形で、1896年の「病夫」言説の誕生にいたる過程と1903年の「論尚武」の背景をそれぞれ検討したい。

「病夫」言説の初出は、梁啓超が主筆をつとめる『時務報』10冊（1896年11月5日）に転載された「中国実情」の「夫中国一東方之病夫也」である。その約1年半前にあたる1895年3月、嚴復が天津の『直報』に「原強」と題する文章を連載した。嚴は日清戦争の敗戦に触れ、中国の積弱不振を嘆きつつ、この危機はこれまで中国が経験したことのないもので、それに対処する必要があると力説する。「原強」の最後のほうで嚴は、人間の身体は使わなければ駄目になるし、使えば強くなるが、「病夫」に無理をさせれば死を早めるだけだとして、中国を「病夫」に喩えた（中国者固病夫也）。いたずらに西洋の事物を導入するよりも、まず民智、民力、民徳を高めることが富強を達成する根本的治療法だと主張したのである<sup>(26)</sup>。ここで嚴のいう「民」の範囲がどれだけの広がりを持つものか、そして「民」の身体がはたして改造の対象だったのかは疑問の余地が多い。「原強」を読むかぎり、嚴が健康な身体、強靱な身体を富強の手段と認識していた形跡はない。たしかにアヘンへの言及があるが、西洋のもので中国がひろく受け入れたのはアヘンだけだったと皮肉っているだけで、アヘンの廃絶を富強と結びつけたわけではない<sup>(27)</sup>。嚴が「Sick Man」を知っていた可能性は否定できないが、ここでは病人を指す普通名詞と考えてよかろう。ただし「病夫」認識の根底に男性性の問題があることを見逃してはならない。日清戦争で小国日本に敗れたことで、中国は「自存」も「遺種」も危ぶまれる状況にあると嚴は認識し、その責任を士大夫に帰した。士大夫といえ、中国社会で最高の男性性を体現する存在である。「中国の秀民」「斯民の坊表」であるはずの士大夫は、もはや人びとが見習うべき対

象ではなくなっていた。見習うべき対象は豊かで強い西洋や日本であった。日清戦争敗北の衝撃は、中国（人）の男性性を再編させる契機となったのである<sup>(28)</sup>。

「中国実情」の5か月前、リード（Gilbert Reid 李佳白）は「探本窮源論」のなかで「中国の状況はあたかも「一大病人」のようだ（中国之情形、譬如一大病人）」と論じていた。リードが西洋の「sick man」を念頭に置いているかどうかは不明だが、もしそうだとすれば（「病夫」ではなく「病人」であるが）「病夫」言説の初出ということになる。楊瑞松が指摘するように、この文章は清朝政府に対して政治、財政、教育などに関する意見を提示したもので、国家の「病」という比喩は西洋でも珍しいものではなく、「病人」はとりたてて侮辱的な表現とはいえない。楊はさらにリードと梁の関係に触れ、梁がリードの影響を受けた可能性を示唆する<sup>(29)</sup>。

事実、梁は「探本窮源論」が刊行されてしばらく後、『時務報』2冊（1896年8月29日）に「論変法不知本原之害」を掲載し、中国を「病夫」に喩えた（「中国実情」の2か月前にあたる）<sup>(30)</sup>。梁いわく、西洋人の練兵はあたかも壮士が甲冑を身につけ武器を手にするようだが、今日の中国は「病夫」であるのに（若今日之中国、則病夫也）、病気を治すことにつとめず、かえって壮士をまねようとしている、これは天下を亡ぼすものだ、と。このロジックはリードよりもむしろ嚴復の「原強」を想起させる。さらに、この「病夫」は梁自身が用いた比喩であって、西洋人の言葉を引用したものではない。梁は西洋人が中国を「東方病夫」と呼んでいることを知る前に、すでに中国を「病夫」と形容していた。とするなら、西洋起源の「東方病夫」は、日清戦争後に中国の知識人が抱きはじめた「病夫」としての中国像に、いわばお墨付きを与える役割を果たしたといえるのではないか。

西洋の比喩表現としての「病夫」と中国の比喩表現としての「病夫」の差異は恥の感覚の有無にある。たとえば寿富は『時務報』に寄せた「知恥学会後叙」に「瓜分の論がおおっぴらに語られ、「病夫」の喩えが堪えがたいほど〔中国を〕罵倒するのを思えば、我々は恥すべきである」と述べている。「病夫」というレッテルから呼び起こされる恥は、「われらが君主や宰相の恥にとどまらず、わが中国四億人の「公恥」であった<sup>(31)</sup>。陳天華「警世鐘」の有名な一節もまた恥の感覚に貫かれている。

恥だ！恥だ！恥だ！見よ、堂々たる中国は昔から今にいたるまで周囲の小国から天朝大国と呼ばれていたではないか。どうして今になって一等国から四等国に落ちてしまったのか。外国人は「東方病夫」と罵るのでなければ「野蛮賤種」と罵っている。<sup>(32)</sup>

陳のような留学生たちはとりわけ恥の感覚に敏感だった<sup>(33)</sup>。本国ではエリートだった彼らだが、日本では子供たちから「チャンチャン坊主」と冷やかされた。日本でこのような恥辱を味わわなければならなかったのは、ひとえに彼らが中国人であるからだった。個人的な経験はネイションの地位と密接に結びついていた。自らの男性性を回復するには、ネイションの男性性を回復しなければならない。そんな彼らが「病夫」言説をすんなりと受け入れたのは決して不思議ではない。中国人にとって「病夫」言説は中国人自身による改革を促すために用いられたが、西洋人はこれを中国への干渉を正当化するための口実とした。「病夫」言説はリウのいう「共著性」や楊のいう「自我東方化」、別の言葉でいえば、西洋と中国の同床異夢のうえに構築されたものだった<sup>(34)</sup>。ここで注意すべきは、この時点では楊も指摘するように、雪辱の手段は変法であって、身体には関係がなかったことである<sup>(35)</sup>。

繰り返しになるが、「病夫」言説が身体性を帯びる契機となったのは梁啓超の「論尚武」であった。前稿で指摘したように、「論尚武」の革新性は、「病夫」言説を介して国民の身体を救国と結びつけた点にある。本稿では「論尚武」と軍国民の関係についてより詳しく検討してみたい。「論尚武」が発表された1903年、梁啓超はたびたび「病夫」「東方病夫」を用いていた。『新民叢報』26号から29号には頻繁に「病夫」「東方病夫」の言葉が見える<sup>(36)</sup>。これら4号の奥付は2月26日から4月2日にわたるが、実際の刊行は4月中旬から6月中旬であった<sup>(37)</sup>。これはあたかも拒俄運動が高潮を迎える時期にあたっていた。4月29日に東京で拒俄義勇軍が成立し、5月2日には学生軍、5月11日には軍国民教育会と改称し、「尚武精神を養成し民族主義を実行」すべく、軍事訓練や火薬製造などの活動を展開していた。同じころ陳独秀は故郷の安徽省で、いま重要なのは消息、思想、体魄であると演説し、身体鍛錬の重要性を宣伝していた<sup>(38)</sup>。陳の演説が掲載された『蘇報』には「病夫」がなんども登場する。たとえば、「論青年会体操班事」は次のように論じる。

諸君、諸君、わが中国人が弱くなった原因を知っているか。国を見るのに長けたものはその民を見る。いまわが国民は背中が曲がって伸びず、歩みはふらふらとして進まず、困憊して消沈したさまは病気のようにあり、落胆して息絶え絶えなさまは幽霊のようである。わが数千年来の文明の祖国はついに「東方の一病夫」として世界に知られることになった。国を強くしようとすれば、まず身を強くし、身を強くしようとすれば、まず体操を実践するのは、智者を待たずともわかることである。<sup>(39)</sup>

また、「無錫体育会集捐啓」では、中国が従来文弱として世界に知られ、最近では「東方病夫」「白人奴隸」といった言葉が脳に刻まれ耳に喧しい、と説く<sup>(40)</sup>。この無錫体育会は、

「体育を発達させ、以て軍国民の資格を養成する」ことを目的に設立された団体である。楊瑞松が挙げた「国民衛生学」もまさしく同じころの文章である<sup>(41)</sup>。これらの事例から、「病夫」言説が尚武や軍国民と密接な関係を持ち、身体の鍛錬が「病夫」の再男性化の手段の一つと認識されていたことがわかる<sup>(42)</sup>。ただし、本章冒頭で触れたように、これらの「病夫」はいずれも他者が中国にかぶせたレッテルとして用いられ、直接身体を指してはいない。

身体を通じた国家と国民の関係は、1904年1月に奏定学堂章程が公布され、高等小学堂以上の男子学生に兵操が課されたことでいっそう緊密となる。1906年5月に上海道台の瑞澂は、上海の紳商が設立した華商体操会の開会式典に参加し、嘉納治五郎の「中国の教育は必ず体育を重視すべきである」「文を重んじ武を軽んじる風習に反対し、全国皆兵の制度を実施する……」という言葉を用いたうえで、中国は文弱の積弊により、「老大」「病夫」との譏りを受けるようになったと述べ、軍隊や警察の不足を補うものとして体操会を高く評価した<sup>(43)</sup>。清朝は体操を通じて人びとの身体にネイションを刻み込もうとしたが、革命は同じく体操に拠りながら別のネイション（漢族のネイション）を刻み込もうとしていた<sup>(44)</sup>。

革命派の「病夫」言説は、孫文にも起源をたどることができる。孫が最初に「病夫」を用いたのは、1903年9月に刊行された「支那保全分割合論」においてである<sup>(45)</sup>。さらに、1904年8月末にアメリカ滞在中に書き上げた文章「The True Solution of Chinese Question」では「Sick Man of the Far East」という言葉を使っている。この文章はアメリカで出版され、年末には日本で中国語版とあわせて刊行された。『孫中山全集』には中国語版の2つのバージョンが収められており、一つは「東方病夫」、いま一つは「東亜病夫」と翻訳されている<sup>(46)</sup>。ここから、「東方病夫」と「東亜病夫」にはさして意味の違いがなかったことがわかる。これに対して汪精衛は「遠東病夫」を使った。ある文章で汪は、「東方病夫」はもともとトルコを指していたが、その後この言葉が清国にも贈られ、ついにトルコは「近東病夫」、清国は「遠東病夫」となったと述べている<sup>(47)</sup>。清末の用例の数から判断して、「東方病夫」が主流であり、「東亜病夫」「遠東病夫」は「東方」「東亜」「遠東」などの地域概念の曖昧さのために、「東方病夫」から派生した表現であると考えられる（清末には「東亜」より「東方」のほうがよく使われた<sup>(48)</sup>）。

「病夫」言説は男性性との関わりが深いですが、女性に関する、あるいは女性による「病夫」言説がないわけではない。『女子世界』には、纏足の母のせいで人びとがみな「病夫」になり、わが国の人は地球万国から笑いものにされているという主張がある<sup>(49)</sup>。ただし、作者の竹庄（蔣維喬）は男性である。女性自身によるものとしては、煉石（燕斌）「本報五大主

義演説」がある。西洋人が「東方病夫」と嘲笑するのは、中国の女性がみな「血気病」にかかっているために、その子供たちは強健に育たず、一代一代と弱くなっているからである。燕によれば、「血気病」の原因は、彼女たちに奴隷に甘んじることを求める旧道徳であった<sup>(50)</sup>。男性が軍国民となることを求められたのに対して、女性は軍国民の母にふさわしい存在となることを求められた。女性は中国の再男性化のために、纏足や旧道徳のような従来の女らしさと決別することを迫られた。女性はそうすることで女国民として、国家に間接的に貢献することができた。このように軍国民を基軸にジェンダー（男性性／女性性）が再構築されていったのである。

楊瑞松は梁啓超の「論尚武」(1903年)に続いて東亜病夫(曾樸)の『孽海花』が5万部をこえる売れ行きを示し、「病夫」が定着したとするが、この点はどうだろうか。1905年以降も「病夫」言説を確認することは難しくない。たとえば、穀生「利用中国之政教論」(1905年)が「東方病夫」に、吳魂「中国尊君之謬想」(1906年)が「病夫国」に、鉄崖「名説」(1909年)が「東亜之病夫」に言及している<sup>(51)</sup>。変わったところでは、「冒険小説片帆影」が主人公の黄漢生を東方病夫国某県の資産家の息子と紹介している<sup>(52)</sup>。「東方病夫国」は物語の筋とは関係なく、たんに中国の別称として用いられている。これは、「病夫」言説がある程度普及していることを前提にした表現である。しかし、いくら事例を挙げても、清末の文章全体から見れば微々たるものにすぎない。梁啓超は1904年以後、「病夫」言説を用いることはなかった<sup>(53)</sup>。梁の場合、働きかけの対象が国民から政府に移り、「病夫」が後景に退いたと考えることができる。では、いったい清末の「病夫」言説はどれくらい知識人の想像力をとらえたかのだろうか。次節では『申報』を使って数量的な問題を考えてみたい。

## 2 『申報』の分析

まず記事から論じる。「東方病夫」の初出は1905年2月25日の記事で、留学生に関する政策について論じるなかで、「すっかりわが「東方病夫」の恥を洗い流せるだろうか」と論じる。他の記事の内容は教育、医薬・衛生、政治、国際情勢と多岐にわたる。「東亜病夫」の初出はほかならぬリードの講義である。「東亜病夫」の記事の内容は国際情勢、国民性、政治である。

「東方病夫」「東亜病夫」の記事が少ないので、考察の対象を「病夫」に広げてみよう。清末の「病夫」は964件の用例が確認できる。このうち、「東方病夫」、「東亜病夫」、およびたんに病人を意味する普通名詞としての「病夫」を除外すると、40件の記事が得られる。初出は1900年5月23日で、「病夫」はトルコを指している。中国を「病夫」とする記

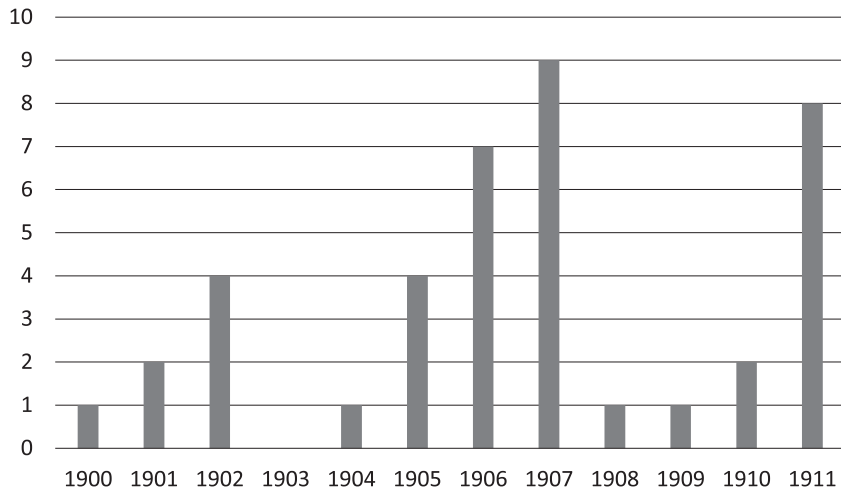
事の初出は1901年7月21日である。「病夫」の記事の内容を分類してみると、医薬・衛生が10件、教育と政治が各5件、国際情勢と軍事が各4件、経済が2件、体育が1件、武術が1件、その他が8件である。医薬・衛生のうち、5件はアヘン禁絶に取り組む振武宗社に関わるものである。時期的な分布は表6の通りである。

以上の記事で特徴的なのは、「病夫」言説が特定の内容と結びつくものではなかったという点である。たとえば、「禁煙後之希望」という記事は、「二十世紀の病夫」となった中国を再男性化させる方法として、国際的名譽を全うすること、国民の公利を保つこと、軍

表5 清末「東方病夫」「東亜病夫」記事一覧

	年月日	タイトル	分類	使用語
1	1903年11月19日	美儒李佳白先生講義	国際情勢	東亜病夫
2	1905年2月25日	敬告官派留学生	教育	東方病夫
3	1905年5月17日	論中国民気有發達之機	国民性	東亜病夫
4	1906年2月20日	澳洲煙禁詳述	医薬・衛生	東方病夫
5	1906年9月20日	敬告今日之同胞	政治	東方病夫
6	1907年11月29日	論說四国協約後之中国	国際情勢	東方病夫
7	1909年3月24日	論日土外交之起点	国際情勢	東方病夫
8	1911年4月28日	再論新内閣官制草案	政治	東亜之病夫
9	1911年6月9日	参薬業成立頌詞	医薬・衛生	東方之病夫

表6 清末「病夫」記事件数



隊の強武を示すことを挙げている<sup>(54)</sup>。中国の再男性化の手段は多様な形で想像されていたのであり、身体的側面がとくに強調されたわけではない。これは次のように考えることができよう。すなわち、西洋人が中国を形容した言葉「Sick man of East Asia」を、中国人は「東方病夫」として受け取った。若さや壮健さを重んじる近代西洋の文脈では、「子供」「老人」「病人」は男らしくない存在であり<sup>(55)</sup>、中国の近代化を目指す進歩的知識人は、このような価値観を内面化し、「東方病夫」である中国を男らしくない存在であると感じ、そのことを恥じた。女性化した中国を再男性化するために、彼らはさまざまな手段を模索した。身体強化、鍛錬はその一つであった。あるいはこうも言えよう。「病夫」と名指された中国人は、自己の身体だけでなく、教育制度や軍隊など比喩的な身体、言い換えれば「国家・民族の身体」をより多く想像した。そしてその比喩的な身体のイメージに添って、身体強化にとどまらない多様な再男性化の手立てを模索したのである。

広告に目を転じると、やや違った光景が見えてくる。というのも、「病夫」言説を含む広告の数はきわめて多いからである<sup>(56)</sup>。ただし、そのほとんどは同一の文面で、「東方病夫」は5種類、「東亜病夫」は2種類しかない（表7参照）。いずれも医薬品の広告である<sup>(57)</sup>。「病夫」という言葉が、病気と深い関係にあることを考えると、医薬品の広告に「病夫」言説があらわれるのが1906年というのはいかにも遅い。これは「病夫」にまで検索の範囲を広げても同様である<sup>(58)</sup>。

その理由は広告をめぐる消費文化の構造に求められる。張仲民によれば、万民に開かれ万民が責任を持つという清末の新しい政治文化は消費文化をも政治化した。商人は衛生、身体、種族、国家といった流行の言説を広告に取り入れることで、商品の合法性を獲得し、消費者の欲求やアイデンティティを刺激するようになった。その嚆矢が中法大薬房による

表7 清末医薬品広告の「東方病夫」「東亜病夫」一覧

	薬名	種類	初回	最終回	回数	使用語
①	亜支奶戒煙薬	禁煙薬	1906年1月28日	1906年2月16日	15回	東方病夫
②	壹百零五日尅煙織薬	禁煙薬	1906年3月5日	1906年4月26日	53回	東方病夫
③	戒煙万靈薬	禁煙薬	1906年5月24日	1906年6月5日	6回	東亜病夫
④	亜支奶戒煙薬	禁煙薬	1907年5月7日	1907年5月9日	3回	東方病夫
⑤	日光鉄丸、月光鉄丸	滋養強壯薬	1908年6月18日	1909年7月28日	13回	東方病夫
⑥	哮喘氣急丹*	喘息薬	1908年9月26日	1909年4月17日	47回	東亜病夫
⑦	哮喘氣急丹	喘息薬	1909年11月16日	1911年6月23日	143回	東亜病夫

\*⑥と⑦はタイトルが違うものの、同じ薬の広告で、文面もほとんど同じである

艾羅補腦汁の広告で、1905年3月のことだった。同広告は、20世紀は科学発達の時代、人種競争の時代であり、優勝劣敗は脳力の強弱によって決まるとして、補脳（脳への栄養補給）の必要性をアピールした<sup>(59)</sup>。艾羅補腦汁の広告を契機に、政治的な言説が広告に採用され、「病夫」言説があらわれることになった。

表7からわかるように、初期の「病夫」広告はもっぱら禁煙薬（アヘンを断つための薬）だった。亜支奶戒烟薬の広告は、この薬は日本人の水野正太郎が開発したもので、アヘンを断つことができれば、愛国思想が増し、尚武精神が奮い立ち、20世紀の「帝国経済主義競争の時代」に中国は雄飛し、「東方病夫」の譏りを挽回できるだろうと説く（表7-①）。壹百零五日尅煙織丸の広告は、外国人の黄医師が上海を訪れ、人びとの飢えてやせ衰えた様子を見て、キリスト教の博愛の宗旨から中国人を救うために禁煙薬を開発したと説明し、もし禁煙できれば、外国人はもはや中国人を「五洲賤種」「東方病夫」などと蔑視なくなり、亡国滅種の危機も回避できるだろうと記す（表7-②）。図1は黄医師がアヘン窟を訪れる場面である。画面手前に横たわる獅子は、いうまでもなく、中国の否定的自画像



図1 アヘン患者（病夫）と睡獅 『申報』1906年3月5日



「睡獅」である。宣伝文には、獅子を呼び覚ませば国勢も伸張し、弱きを転じて強きとなると記されている。おりしも、清朝はアヘンを十年以内に撲滅するという上諭を出し（1906年9月）、禁煙ムードが高まっていた。これらの広告はいわば禁煙意識の高まりに乗じた便乗商品であり、その効果は当時の人びとの目から見ても眉唾物であった<sup>(60)</sup>。

アヘンと「病夫」言説の結びつきは、医薬品以外でも認められる。この時期の「病夫」関連の広告で唯一、医薬品と直接関係ないのが「黒籍冤魂」の広告である（1908年6月21日から6月24日の4回。以下、広告の出典は初出のみ示す）。「黒籍冤魂」はアヘンの撲滅を訴える改良新劇であった。

1908年以降は、強壯薬や喘息薬の広告に「病夫」が用いられるようになる。日光鉄丸、月光鉄丸の広告は、中国の積弱の原因を国民体育の不振に求めた（表7-⑤）。喘息薬の広告（表7-⑥、⑦）は合計190件あり、清末の「東亜病夫」「東方病夫」の広告の68%を占める<sup>(61)</sup>。「僕は幼い頃から病気がちで、壮年から老年にいたるまで、つねに病気を抱えながら暮らしを立ててきた。誠に「東亜病夫」に恥じない」とある。この「東亜病夫」は身体を指すであろう。ただし、広告には政治的主張が見えず、外国人の眼も恥の感覚も不在である。

「東方病夫」「東亜病夫」の広告には滋養強壯薬が少ないが、たんに「病夫」であれば、格爾士原牌補脳汁、艾羅補脳汁、愛理士紅衣補丸などの滋養強壯薬の広告が存在する<sup>(62)</sup>。身体の強化を目的とする滋養強壯薬は「病夫」言説と相性がよかった。強健な身体が望ましいものになりつつあったことは、図2のような広告からもうかがえる（ただし、これは望ましい身体の一つでしかない）<sup>(63)</sup>。身体の強さは国家、民族の強さに直結した。「病夫」言説は、身体の虚弱を問題化し、身体強化の必要性を亡国滅種の危機によって正当化し、人びとにその履行を迫ったのである。

広告の氾濫は「病夫」言説の定着を意味するだろうか。広告が「病夫」言説を取り上げたのは、それが多くの人びとに訴える力があると判断したからであろう。しかし、たとえば表7-⑥、⑦のような広告がたくさん掲載されたからといって、それを「病夫」言説が定着した証拠とみなすことができるだろうか。そこで別の角度からこの問題を考えてみたい。具体的には、「病夫」と同じ否定的自画像である「一盤散沙」「睡獅」との比較である。『申報』に掲載された記事の件数は、「東方病夫」「東亜病夫」が12件、「一盤散沙」が7件、「睡獅」が15件、これに対して広告の件数は順に279件、0件、110件である<sup>(64)</sup>。記事の頻度と広告の頻度は必ずしも連動しない。当時の広告のうち最も多かったのが医薬品の広告である。「東方病夫」「東亜病夫」の広告が多いのは、それが「一盤散沙」「睡獅」に比べて医薬品との結びつきが強かったからであろう。

さらにいえば、清末の知識人が本当に恐れたのは、「病夫」ではなく、国家・民族の滅亡であった。「病夫」としての中国には、列強の植民地となるか、独立した国家となるか、いずれかの道しか残されていなかった。当時の語彙で、奴隷と国民は対義語であった。奴隷となることへの恐怖が「病夫」であることの恐怖よりもいっそう切実であったことは、「奴隷」の使用頻度が「病夫」をはるかに上回っていることから容易に判明する。梁啓超は「病夫」の具体的なイメージを「成人して後は、閨中を離れず精力を消耗し、アヘンを吸って身体を損なう。生ける屍同然に、ふらふらよろめき、血はよどみ、顔には死の気配がただよい、病気で息も絶え絶えで、なんとか息が続いている有様である」と描写したが<sup>(65)</sup>、梁の周囲の中国人がみなこのような「病夫」だったとは考えられない。四億人がみな「病夫」であるというのは、明らかに、過度に誇張されたイメージである。むしろ、たとえ身体は健康であっても、奴隷の地位に甘んじることこそ、本当に恐るべきことであった<sup>(66)</sup>。

清末の「病夫」言説は、現在の「病夫」言説とかなり異なる様相を呈していた。とするなら、体育や武術など、身体との強い結びつきはいつごろどのように形成されたのだろうか。この問いに答えるべく、次章では体育や武術に関する言説に焦点を当て、「病夫」言説との関係を考察する。

## II 北京政府時期の「病夫」言説

### 1 『新青年』と体育・武術

「病夫」言説によって体育を正当化する議論は清末を通じて見られる。前稿でも紹介した1906年の京師大学堂の運動会に関する記事のほかにも、蔣維喬「論学堂軽視体育之非」(1909年)、浮邱「学生体育問題」(1910年)を挙げることができる<sup>(67)</sup>。辛亥革命後も、たとえば1914年10月に武昌高等師範学校で開催された秋季運動会に出席した段芝貴將軍は挨拶のなかで、体育を修めないために果敢の気がなくなり、外国人に「支那病夫」と譏られると述べた<sup>(68)</sup>。また、1915年10月の江蘇省立学校第二次連合運動会を参観した呉家煦も20年来の学校体育にもかかわらず、学生たちが青白い顔をし、近視で背が曲がり筋肉がたるんでいるさまを見て、「東方病夫国」に言及している<sup>(69)</sup>。



図2 清末の強健な身体  
『申報』1905年4月22日

とはいえ、当時の体育に関する言説のなかで、「病夫」に触れるものは決して多くない。たとえば、徐一冰は1914年に「体育与武力辨」、「整顿全国学校体育上教育部文」、「論学校体育」などの文章を発表したが、「病夫」は使っていない<sup>(70)</sup>。軍国民式の体育に反対した徐を取り上げたのは、彼が1908年に創設した中国体操学校が「増強中華民族體質、洗刷東亜病夫恥辱」という校訓を掲げていたとか、彼が1905年に日本に留学したのは「東亜病夫之声、籍籍盈吾耳」の刺激を受けたからだとか言われているからである<sup>(71)</sup>。しばしば「東亜病夫」と結びつけて語られる徐一冰だが、管見の限り彼の著述に「病夫」言説を確認することはできない。

1915年から1916年にかけて、陳独秀はさかんに青年のあるべき姿を論じていた。たとえば、「敬告青年」では、自主的／奴隸的、進歩的／保守的、進取的／退隱的、世界的／鎖國的、実利的／虚文的、科学的／想像的、という6つの対立項を列挙し、各項の前者を青年のそなえるべき資質とみなした<sup>(72)</sup>。「今日之教育方針」では、強大な民族は人性と獣性が同時に発展するが、「わが国で教育を受けた青年を見ると、手に鶏を縛る力なく、心に一夫の雄なく、白面纖腰、嫵媚なこと処女の如く、寒さを畏れ熱に怯え、柔弱なこと病夫の如くである。かく心身薄弱の国民がどうして任務の重さと前途の遠さに堪えられようか」として、獣性主義の教育の必要性を指摘した<sup>(73)</sup>。「一九一六年」では、征服の地位に自居し、被征服の地位に自居するなかれ、と青年に呼びかけた。陳によれば、男子は征服者、女子は被征服者であり、白人は征服者、非白人は被征服者であり、蒙古、満洲、日本は征服民族、漢族は被征服民族である。青年は独立自主、自由自尊の人格を持つべきで、さもないと被征服者である女子、奴隸、捕虜、家畜の地位におちてしまう。1916年の男女青年を自負するものは、力強い国民となることに勉めねばならないのだ<sup>(74)</sup>。また「新青年」では、新青年と旧青年の区別を論じる。旧青年は体が弱く、衛生も知らず、「做官發財」を第一と考える。このためわれわれは「東方病夫国」「支那賤種」「卑劣無恥」と呼ばれることになった。欧米や日本では、衛生や体育を通じて青年は壮健活潑に、国民は進取有為になっている。中国の青年は、内に個性の発展、外に社会の貢献を図り、強健な身体、正当な職業、偽りでない名誉を幸福と考え、「新青年」「真青年」とならねばならない<sup>(75)</sup>。西洋や日本の青年を理想の男性像に掲げる陳独秀の青年観は、コロニアル・マスキュリニティそのものであった<sup>(76)</sup>。

陳独秀の青年論で身体が重要な位置を占めていることは注目されてしかるべきである。前章で触れたように、陳は早い時期から身体鍛錬の重要性を主張していた。第一次世界大戦の勃発は身体鍛錬の重要性をいっそう高めることになった。『新青年』に毛沢東「体育之研究」をはじめとする体育関係の論説が掲載されたのも、陳の身体重視の姿勢を受けて

のことと考えられる<sup>(77)</sup>。ただ一方で『新青年』の論者のなかには、民を強くする手立てとして、身体よりも道徳や精神を重視するものもいた<sup>(78)</sup>。

陳独秀の文章との直接的な因果関係はたどれないものの、1910年代後半になると体育関係者による「病夫」言説が着実に増える。たとえば、1918年冬に書かれた朱亮による郭希汾『中国体育史』への序文は、「一国の盛衰強弱はつねに国民の精神および体魄を基準とする。わが国は千年来、文を尊び武を軽んじてきた。積弱はすでに明らかで、遂に「東方病夫の国」と称されている」と記す<sup>(79)</sup>。郭は尚公小学で教鞭をとるかたわら、愛国女学校と新設まもない東亜体育学校で体育史を講じていた<sup>(80)</sup>。1919年創刊の『東亜体育学校校刊』の序では、四千年の歴史をもつ四億人の中国がどうして「病夫の国」「老大の邦」と呼ばれて衰弱し、再起不能になったのかと綴られている<sup>(81)</sup>。同じころ、湖南省の体育教師、黄醒が創刊した『体育週報』でも、「東亜病夫」への言及が見られる<sup>(82)</sup>。やや遅れて、愛国女学のほうでも「病夫」言説を確認できる<sup>(83)</sup>。

ここで、女性と「病夫」言説の関係に触れておこう。1917年の『新青年』に掲載された陳華珍「論中国女子婚姻与育兒問題」は女性が「病夫」に言及した数少ない事例の一つである<sup>(84)</sup>。陳によれば、中国の人口は4億人とされるが、その半ばは不具で虚弱な女性が占め、残る半数の男性も頑固なものが多数で、国家に奉仕できる「健良完全の国民」はわずかしおらず、国勢は日々弱まり、外国人に「病夫」との譏りを受けるにいたった。そこで、「健良完全の国民」を養成するために婚姻と育兒を重視すべきである、と陳は主張した。陳がいう「国民」に女性は含まれない。陳は男尊女卑を否定しつつも、男女の能力や体質は異なるので、その地位や権利は当然異なると述べ、女性を「国民の賢母良妻」に位置づけた。女性は間接的な形でしか、中国の再男性化に関与することができなかった。あるいは、女性は「国民の賢母良妻」となることで、中国の再男性化に寄与することができると言うこともできよう。身体の強健は「国民の賢母良妻」となるための必須条件であった。

『新青年』の影響はむしろ武術においてより顕著だった。武術界の「病夫」言説は、蕭汝霖の手になる「大力士霍元甲伝」と「述精武体育会事」がおそらく最初のものであろう<sup>(85)</sup>。なぜ中国の伝統に反対した陳が武術家の伝記を掲載したのか。

霍元甲に関する最も早い伝記は、丕文「記霍元甲逸事」で、1913年に上海広益書局から刊行された胡寄塵編『虞初近志』に収録されている<sup>(86)</sup>。そこには、霍が天津から上海に来て、アメリカ人や中国人、さらには日本人と対戦したこと、精武学堂を創設して尚武精神を鼓舞したことが記されている。これに対して、蕭汝霖「大力士霍元甲伝」には、丕文のものには見えないエピソードが数多く挿入されている。たとえば、霍元甲は子どもの

ころいつも年下の子どもに打ち負かされていたので、武術家だった父は家名を汚すことを恐れ、元甲に武術を習わせなかった。しかし元甲は父らの練習の様子をのぞき見てひそかに練習し、10年あまりで誰にも負けないほど強くなったという。このエピソードから「病夫」も鍛錬すれば西洋人や日本人に打ち勝つことができるというメッセージを読みとることは難しくない。霍元甲の伝が21か条要求受諾から半年ほどしか経っていない時点で書かれたこと、作者の蕭が反日運動で主要な役割を果たしていたこと（後述）を考えあわせれば、その意義はいっそう明瞭となろう。蕭は霍に「わが国は病夫の国であり、わたしは病夫の国の病夫である」と語らせた。「病夫」言説の根源に外国からの侵略の脅威と国際社会での承認への希求があったとするなら、霍元甲の逸話はまさしく「病夫」言説にふさわしかった。武術は当時の中国において、「病夫」の克復を誇示できる数少ない手段であった<sup>(87)</sup>。

1918年11月15日刊行の『新青年』で魯迅は拳術を義和団になぞらえて批判した<sup>(88)</sup>。この批判は、第4回全国教育連合会で馬良が制定した中華新武術を高等以上の各学校や専門学校の正式な体操として採用するという議案が通過し、全国中学校長会議でも中華新武術を中学校の正式体操とすることが決定したのを受けてのことであった。おりしも、ヨーロッパでは休戦が実現してドイツ流の軍国主義の破綻が誰の目にも明らかとなり、教育界では軍国主義への批判が高まっていた。陳独秀の武術観も大きく変わり、1920年1月の「随感録 青年体育問題」では、学生がやるべきではないこととして、「兵式体操」「拳術」「比賽的劇烈運動」を挙げている<sup>(89)</sup>。

しかし、五四運動の担い手たちの批判は、武術の発展を妨げることはなかった<sup>(90)</sup>。この間、武術界は伝統的なイメージからの脱却を図り、武術の科学化（体系化、普遍化、標準化）、都市化、近代化、国際化を進め、さらに女性にも広く門戸を開き、新しい中国の国民にふさわしい武術を模索していた<sup>(91)</sup>。霍元甲が創設した精武体育会は、武術だけでなく、スポーツ、音楽、兵操、文学などの活動も展開し、「伝統的な中国文人の風格と、現代の理想的国民が備えるべき強健な身心を完全に結合した」男性性の構築を目指していた<sup>(92)</sup>。彼らが推進したのは、新しい共和国にふさわしい近代的な男性性であり、それは「筋肉的ゲール人」「男性的ヒンドゥー教」の中国版ともいえた<sup>(93)</sup>。精武体育会の英語名称「Chinese Athletic Association」は、ゲール人体育協会「Gaelic Athletic Association」を思い起こさせよう。ただし、彼らが推進した男性性が中国社会で主流となることはなかった（図3）。

精武体育会の関係者はしばしば「病夫」言説に言及した。たとえば、1919年4月に広東精武体育会が設立されたさい、広州の新聞には「人は誰もが軟弱を悪み、強健を喜ぶ。「東亜病夫」の羞を、どうして同胞は甘受できようか」「東方病夫」はいささかも生気がな

い。病夫が積み重なって病社会をなし、病社会が積み重なって病国をなしている。ひとたび列強と関係するやたちまち失敗してしまうのも当然だ」などと、「病夫」言説によって会の意義を説明している<sup>(94)</sup>。

ここで興味深いのは、霍元甲のエピソードで用いられる言葉の変化である。蕭汝霖の「霍元甲伝」では「病夫」だったが、1923年の武侠小说ブームの口火を切った向愷然『近代侠義英雄伝』では「東方病夫」となっている<sup>(95)</sup>。さらに、1925年に上演された「大俠霍元甲」という劇の広告では、霍元甲は「中国人は東亜病夫」だと言われ、これを「絶大なる国恥」と感じて、勝負を挑んだとする<sup>(96)</sup>。「病夫」から「東方病夫」、そして「東亜病夫」への変化は、冒頭で示した「東方病夫」から「東亜病夫」へという「病夫」言説の傾向と一致している<sup>(97)</sup>。

最後に指摘しておきたいのは、精武体育会と政治との関係である。同会は「政治には一切関与しない」とうたっていたものの、孫文、汪精衛、胡漢民ら国民党の政治家の支持をえていた。国民党との繋がり、南京政府時期の武術を考察するさいに重要となるだろう。

## 2 極東選手権競技大会

本節では極東選手権競技大会（中国語で遠東運動会。以下、極東大会と略す）と「病夫」言説の関係を検討する<sup>(98)</sup>。極東大会を選んだのは、現代の「東亜病夫」がしばしばオリンピックのような国際競技会に関係する文脈で用いられているからである<sup>(99)</sup>。

1915年5月15日に上海で第2回極東大会が開幕した。同大会には中国、日本、フィリピンが参加し、中国が優勝した。前稿で指摘したように、大会関連の報道には、「病夫」が使われてもおかしくない文脈にさえ「病夫」は用いられていない。唯一、「病夫」言説に近いのは、復旦公学の校内雑誌に掲載された「優勝がこともあろうに著名な大老病国の得るところとなったのは、これまたいささか誇りとするに足るものではないか」という記事である<sup>(100)</sup>。「大老病国」は「老大病夫」とほぼ同義と思われるが、肯定的な文脈で用いら



図3 精武体育会の男性性  
『中央』18期、1923年4月1日

れている点が興味深い。

今回の極東大会の報道に「病夫」言説が見られなかった理由は2つある。第1の理由は、前節で論じたように、1915年5月の時点では、体育と「病夫」言説の間にまだ強い結びつきがなかったためである。第2の理由は、直前におきた21か条要求の受諾の影響である。極東大会での優勝は肯定的な未来を予想させた。「祝中国運動家」と題する記事は、第一歩として、中国が次回日本での極東大会に勝利し、その後の極東大会にも勝利すること、第二歩として、オリンピックに参加し優勝すること、第三歩として、運動家の勝利から発憤して、将来わが国が世界においても勝利の地位を獲得すること、を予祝した<sup>(101)</sup>。しかしながら、このような楽観的な未来像は、大会直前に起こった21か条要求の受諾という事実のまえに震まずにはいられない。中国の勝利を記念して開かれることになった提灯会に対して、次のような批判が寄せられた。

運動に勝利して提灯会を挙げるのは、また体育奨励の手段ではある。ましてや、強隣が間近に迫っているのだから、なおさら尚武精神を振作すべきである。ただ今回の交渉が失敗に終わり、まさに国民が臥薪嘗胆しているおりに、国恥を記念するのもお及ばざるを恐れるのに、区区たる運動の勝利をもってあたかも得意の色をなすのは針小棒大の嫌いがある。ましてや、わが国が〔21か条〕要求を承認してのち、日本人はまさに大喜びで提灯会を挙行している。あちらの提灯会とこちらの提灯会を比べれば、運動家はどのような感想を抱くであろうか。ゆえにわたしは体育を提唱することにはもとより賛成だが、提灯会を挙行することに迎合するわけにはいかないのだ。<sup>(102)</sup>

この文章の末尾には「汝霖投稿」と記されている。蕭汝霖が執筆したと考えて間違いないだろう。日本に留学中だった蕭は、21か条要求が提出されると、中国政府がこれを受諾するのを防ぐために帰国し、日本留学生代表として上海で反対運動に加わっていた。蕭らの活動は、日本側の要請もあって租界当局の取り締り対象となり、蕭は4月9日に日貨ボイコットを鼓吹し中日両国の国交を妨害し租界の治安を脅かしたとの理由で会審公廨に起訴、拘留された<sup>(103)</sup>。そんな蕭が翌年に霍元甲伝を書いて区々たる武術の勝利を称揚したのは皮肉な巡り合わせであった。ともかく、提灯会は租界当局の圧力で中止された<sup>(104)</sup>。当時の中国は「病夫」の克服を祝福する雰囲気ではとうていなかったのである。

1917年に東京で開催された第3回極東大会になると、「病夫」への言及が見られる。大会直前のある記事によれば、中国人留学生は猫背であったり瀟洒であったり、日本人はこれを「支那式」「病国人民」と呼んできたが、今回来日した中国人選手の筋骨たくましい

様子を見て認識を新たにしたという<sup>(105)</sup>。しかし、こうした肯定的なイメージは、優勝が期待された大会でまさかの惨敗に終わったことでもろくも崩れ去った。YMCAの郝伯陽は、「運動はまず団体を結成し、競争心を持ち、出し抜こうとする気持ちをなくすことで、進歩が速まり、身体が強健になり、「東方病夫」の恥をすっかり雪ぐことができる」と総括した<sup>(106)</sup>。

1921年、ふたたび上海で極東大会が開かれた。それまでの中国の成績は、日本が唯一フルエントリーした1917年の東京大会を除くと、つねに日本に勝っていた。このため、極東大会関係の「病夫」言説には肯定的な文脈で使用されるものがあった。1920年に、セント・ジョンズ大学の顧永泉は、1915年の極東大会の勝利を次のように回顧した。

上海の第2回極東大会で選手権を獲得し、中国人学生たちがスポーツの面で見事な改善を果たしたことに、すべての西洋人は驚いていた。中国に好意を寄せるすべての人びとは、我々の身体的潜在性を目にして喜びに満ちていた。そして我々はこの英雄的勝利に誇りを感じ、これ以降「Oriental Sick」の汚名が雪がれると考えて狂喜した。それは我々の身体的弱さと不活発さに対して与えられた皮肉な名前であり、少なくとも見識ある中国人が感じてきた痛みであった。<sup>(107)</sup>

また、上海で開催される第5回極東大会をまえに、呉退庵はこう論じている。

10年あまり前、西洋人は中国を体育なき民族とみなし、われわれを「東方病夫」と呼んでいた。当時の人士はそれを奇恥と考えたが、今日ではもはやこの言葉を耳にすることはない。その原因を推し量ってみると、運動会の功績が大きい。……過去4回〔の極東大会〕で中国の運動の成績は人後に落ちることはなかった。フィリピンで举行された第4回極東大会で中国は2位となり、その得点は日本を上回った。そこで中国民族の体育精神は大いに世界に示され、むかし「病夫」と罵っていたものはいまや舌を打ち鳴らしてわが体育の優秀さを称賛している。<sup>(108)</sup>

呉の証言は注目に値する。この時点で「東方病夫」はほとんど死語と化していたのだ。その当否については次節で検討する。呉はさらに別の文章で次のように主張している。体育の多大な進歩により「東方病夫」の譏りは聞かれなくなったが、極東大会はしょせん東アジアに限られ、世界各国の中国イメージはいまだに十数年前の「女は纏足、男はアヘン」から変化していない。中国は国際社会の一員であり、また中国に対する誤解を解くために



も、オリンピックに参加するべきである。もちろん、いまオリンピックに参加しても惨敗して恥を搔くのがおちかかもしれないが、参加の意義は勝負にあるのではなく、中国民族の体育を各国人士に示すことにあるのだ<sup>(109)</sup>。

以上に挙げた「病夫」言説は、中国人の変革を促すのではなく、変革した中国人のイメージを国外に伝え、国際社会における中国のイメージを向上させるという文脈で用いられている。過去形の「病夫」は、中国がみずからの進歩を測るためのものさしの役割を果たしていた。北京オリンピックのさいの「病夫」言説もまさにそうであった。もちろん、否定的な意味の「病夫」言説にも事欠かない。周大啓なる人物は、「中国の健男児」たる極東大会の選手に対して、「病夫」の屈辱を晴らすよう求めている<sup>(110)</sup>。

1921年の極東大会はフィリピンが優勝し、大会史上初めて開催国が優勝を逃した。中国はなお日本を上回ったが、1923年以降はおおむね最下位にとどまった（例外は1927年の上海大会で、日本についで2位だった）。国際競技会での惨めな成績は、「病夫」言説をふたたび中国人の身体鍛錬を促す方向に振り向けた。こうして肯定的な文脈の「病夫」言説は短命に終わった。

1927年1月に国民政府教育行政委員会委員の韋愨が起草した「国民政府教育方針草案」は学校で体育訓練を重視すべきだとしてこう記す。

わが国の人民はもとより体育を重視しない。それゆえ「東亜病夫」のあだ名がある。毎回の極東大会でもわが国の代表は優勝を占めることができない。現在、各学校では体育を重視しないところが多く、重視したとしても、系統的な訓練に欠けている。<sup>(111)</sup>

極東大会のような大規模な運動会の目的は、優勝を目指すのではなく、「わが国の「東亜病夫」の恥を雪ぐよう民衆を喚起すること」に置かれた<sup>(112)</sup>。1920年代半ばには、もはや清末のような国家・民族の滅亡に対する危機感は薄れていたが、中国をめぐる国際状況はいっこうに改善していなかった。1915年の極東大会の勝利は、中国の再男性化になんら寄与しなかった。それどころか、いまや極東大会での勝利さえ絶望的な状況にあった。こうして、「病夫」言説は国際競技会よりも国内競技会で重要な役割を果たすようになる。

スポーツの世界は勝敗が明確に決まることから、外国とりわけ日本に対して勝利することができる分野では肯定的な文脈で「病夫」が使われることがままあった。極東大会以外にも、アジア最強を誇ったサッカーをその一例として挙げることができる。上海では1908年から万国サッカー大会が開かれていたが、中国人チームは排除されていた。1925年1月に初出場を果たした中華隊は決勝戦まで進出した。エースストライカーの李惠堂は「五三〇

惨案の発生以後、同胞の弱点は日に日に露見している。いわゆる「老大」「病夫」「一盤散沙」で、とりわけ世界各国の物笑いの種となっている」と述べ、体育の奨励こそ奇辱を雪ぎ民気を高める一法だと主張した<sup>(113)</sup>。李は、サッカーだけが極東大会で連覇し、オーストラリアやニュージーランドに遠征する実力をもっており、このまま切磋琢磨すれば、他のスポーツに先駆けて全世界に名を馳せ、5年も経たずに「東方病夫」の譏りをすっかり雪ぐことができるだろうと考えていた<sup>(114)</sup>。1927年、李恵堂ひきいる楽華足球队がオーストラリア遠征を敢行した。李はその成果を誇りながら、今度は欧米に遠征する日も遠くなく、他のスポーツもサッカーに続けば、「病夫」の譏りが外国人の口の端にのぼることはなくなるだろうと語った<sup>(115)</sup>。翌年、西人足球聯合会（Shanghai Football Association）のAリーグで、楽華は初出場で初優勝を飾った。サッカー界は自信に満ち、「病夫」の克復を楽観できたが、それは国際的に活躍できる実力があってこそであった。

1927年4月14日、林珠光ひきいるフィリピン中華YMCAバスケットボールチームがマニラを発ち、中国、日本遠征に出かけた<sup>(116)</sup>。香港、上海、神戸、大阪、東京で計8回試合をし、全勝の成績でマニラに戻ってきた。日本では当時最強の早稲田大学と対戦、45対40で接戦を制した。帰国後に作成された記念冊子には、英語と中国語で遠征の経過や祝辞が載せられている<sup>(117)</sup>。興味深いことに、中国語で書かれた祝辞14篇のうち、なんと10篇に「病夫」が用いられている。海外での試合、とくに日本に対する勝利はマニラの華僑たちの自尊心をくすぐった。「男兒本色」を示した選手たちの偉業に、期せずして多くのものが「病夫」に思いを致したのである。祝辞は彼らの男らしさを称える言葉で溢れていた。英語版では王麟閣領事がスポーツの「強く、健全な男らしさ manhood」を作り上げる力に言及した。林珠光は「わが母国 Motherland にとってのたくましい男らしさ manhood」のためにスポーツ事業に取り組んでいたのであり、この冊子を「わが愛する祖国 Fatherland のたくましい男らしさ」に捧げたのだった<sup>(118)</sup>。

### 3 『申報』の分析

本節では「東方病夫」「東亜病夫」「病夫」のそれぞれについて、記事と広告の分析をおこなう。まずは「東方病夫」「東亜病夫」の記事から論じる。表8は「東方病夫」「東亜病夫」のそれぞれについて、1912-1920年と1921-1927年の各時期の件数を分類して整理したものである<sup>(119)</sup>。さらにこれをグラフで示したのが表9、10である。

まず表9を見ていただきたい。「東方病夫」は前半に医薬・衛生の文脈で多く使われるが、後半には体育の割合が増え、その他が2割を切っている。逆に言えば、後半では「東方病夫」の8割以上が身体的な文脈で用いられている。これに対して「東亜病夫」(表10)は前

表8 北京政府時期「東方病夫」「東亜病夫」記事内容一覧

	1912-1920		1921-1927	
	東方病夫	東亜病夫	東方病夫	東亜病夫
医薬・衛生	6	1	10	0
体育	1	0	10	6
武術	1	1	6	4
その他	5	5	6	12
合計	13	7	32	22

表9 北京政府時期「東方病夫」記事内容

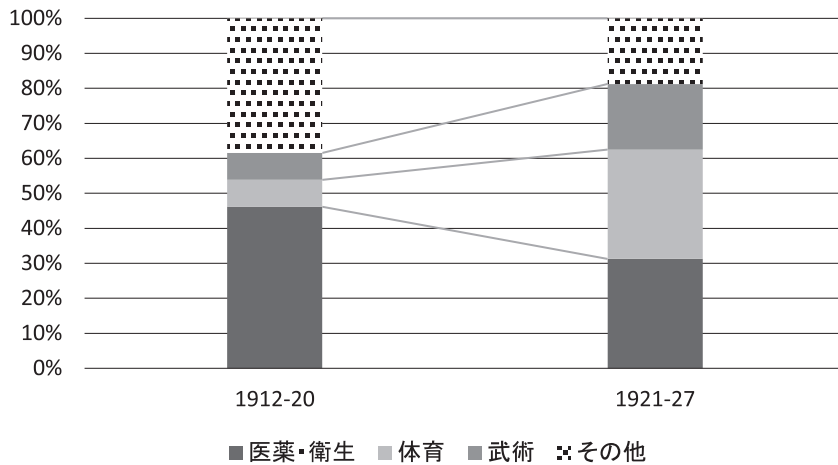
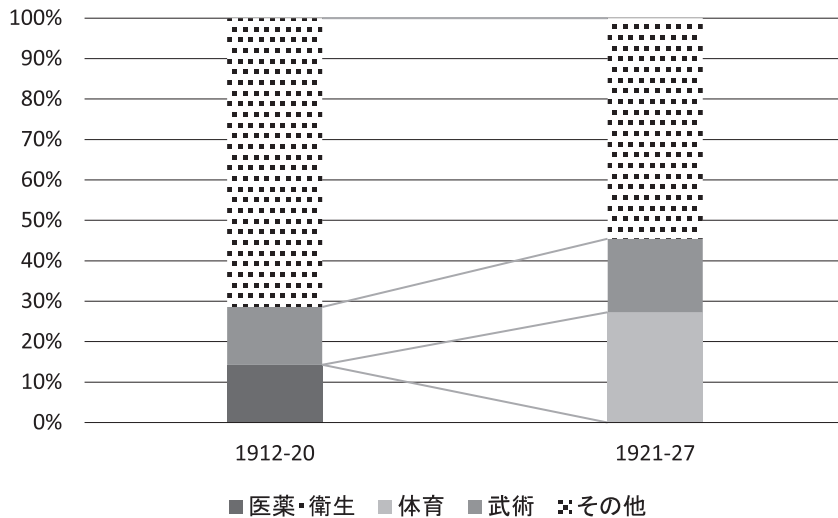


表10 北京政府時期「東亜病夫」記事内容



半ではその他が7割を越えており、後半でも5割を越えている。後半で医薬・衛生が1件もないのは「東方病夫」との顕著な違いである。「東亜病夫」が特定の文脈に固定されていないのは偶然の結果なのか、意図的な使い分けの結果なのか、いまのところ判然としない。「病夫」についても見ておくと、医薬・衛生、体育、武術の割合は前半に21%だったのが、後半には53%にまで上昇しており、やはり文脈が固定化する傾向を確認できる。

体育や武術の割合が増加することについては別の解釈も可能である。これまで見てきたように、体育や武術の世界では、1920年代以前から「病夫」言説がしばしば用いられていた。1920年代は武術や体育が飛躍的に発展した時期であり、『申報』にも関連記事が多数掲載されるようになった。『申報』で極東大会の特集が組まれたのは1921年が最初である。1923年10月15日に創刊された副刊『教育与人生』（週刊）には「体育欄」が設けられた。蔣湘青はその趣旨を述べるなかで「病夫」に言及している<sup>(120)</sup>。こうした体育や武術への関心の高まりが、『申報』に「病夫」言説を持ち込んだと想定できる。

『申報』の「病夫」言説で興味深いのは、外国人の実際の発言のなかで「病夫」が用いられている事例である。たとえば「大石氏荒謬絶倫之論」(1912年9月11日)は(日本の)国民党の領袖大石正己の発言を『大陸報』から転載したもので、大石が中国を「一半身麻木不仁之病夫」にたとえたことが紹介されている。レッテルとしての「病夫」は、このように外国人の発言(とされるもの)によってたえず補強されていた。ただし、外国人の発言がみな中国を見下すものでなかったことは注意したい。1921年に中国を訪れたアメリカの社会学者ディーレイ(James Quayle Dealey 狄雷)は、杭州の安定中学校の演説で次のように語った。

中国人自身の目から見た中国は危なくて救いようのない中国です。他者の目から見た中国は「老大」「病夫」の中国です。しかし実際には中国は前途洋々な少年中国であり、財力富強の中国であります。私から申し上げますと、中国の国民それぞれの頭の中には、きっと理想の中国が存在するはずです。理想の中国はどのようなものでしょう。それは公明正大な中国であり、財力富強な中国です。<sup>(121)</sup>

救い難い中国、「老大」「病夫」の中国は、同時に大きな可能性を秘めた「少年中国」でもあった。学者であるディーレイは中学生に対して、歴史や社会の研究を通じて理想の中国を実現するよう促した。1923年9月8日に掲載されたカラハンの対華宣言は、列強の侵略や内戦により「病夫」となった中国の健康回復を願っているのはソ連だけだと表明している。もっとも、次章で述べるように、ナショナリズムが高揚し、被害者としての感情が増

幅するなかで、外国人の肯定的まなごしはかき消されてしまう。

この時期の「病夫」言説には総じて国家の影が薄い<sup>(122)</sup>。たとえば、「衛生要言十四則」なる文章は、早寝早起き、冷水浴から、体操、風呂にいたる「衛生」法を列挙したあと、数年後には虚弱な国民が強壮な国民となり、欧州各国はもはや我々を「東方病夫」とは見なさないだろうと説く<sup>(123)</sup>。「夫婦之健康与否家庭幸福之関係」は、両親が子供の配偶者を選ぶさいに健康にも留意すべきとし、そうすれば虚弱な子供が生まれることはなく、50年後にはこのような家庭は「東方病夫」の恥を雪ぐことができると説く<sup>(124)</sup>。いずれも「東方病夫」が最後に突然現われる。とくに後者は国家との関係が明確ではない。兪鳳賓が江蘇公学でおこなった演説では、中国人は衛生に注意しないので外国人から「東方病夫の国」と嘲笑されるとし、それに対処する方法として、身だしなみを清潔にすること、手をしっかり洗うこと、爪を整えることなどを挙げる<sup>(125)</sup>。これらの記事が「東方病夫」に言及したのは、日常の衛生の必要性を正当化するためである。清末には国家の再男性化が最優先課題であったが、北京政府時期にはむしろ個人の再男性化に重点が置かれた。この姿勢は、政治から距離を置き、青年の改造による中国の再男性化を目指した陳独秀のそれと呼応する。

国家との距離は、「病夫」言説の件数にも影響を及ぼしているように思われる。この時期は21か条要求、五三〇事件など、国恥の記憶と密接に関わる出来事が数多く起きているにもかかわらず、「病夫」言説の記事は思ったほど多くない。「病夫」言説が見られるのは、主として投稿された記事や文章（「東方病夫」の約7割、「東亜病夫」の約半数）および演説の抄録のなかである。そして、演者の大多数は民間の組織や学校の関係者であった。つまり、この時期の「病夫」言説の主たる担い手は民間人であった。彼らは清末の知識人のように外交や軍事や財政など政府に対する要求としてではなく、体育や武術、医薬・衛生など自らの身体に関わる要求を正当化するために「病夫」言説を用いた。こうして「病夫」言説の文脈が狭められていったのである。

これに対して、広告は人目を引くためにも、読者の関心が高い時事問題を扱う傾向があった。21か条をめぐる日本と中国の交渉のさなかに出された秘製万靈丸散の広告（1915年3月24日）は、日本製品への対抗を打ち出し、薬の効能よりも「国貨」であることを強調している。1915年7月9日の人造自来水の広告は、「毋忘国恥」の四文字を大きく掲げ、文明先進の国であった中国がいまや世界の笑いものとなり、「病夫国」のレッテルまで貼られ、これほど恥ずかしいことはないと述べ、薬によって「病夫」を壮士に変え、国恥を雪ぐことを呼びかけた。袁世凱の帝制運動の時期には、「国体問題緊要 身体問題更属緊要」と題する人造自来水の広告が掲載された（1915年9月18日）。五四運動勃発直後の九造真正水の広告は、銃剣をもつ軍人の下に「為諸君添熱血愛国」という文字を大書して青

島問題のために奔走する愛国者に必要なアイテムであることを強調し、「好男児」はこの薬で「東方病夫」の譏りを免れることができ、愛国婦女は身体を健康にして家政をこなし男子を助けるなどの愛国(的行為)を実行できると主張している(図4)。男女別に語りかけ、「病夫」の恥辱は男性が晴らすべきものとする点に注目したい。

五三〇事件後には、同事件を題材にした広告がいくつも見られる。1925年6月2日の痰敵の広告は「もしこのたびの上海の事件の問題を解決しようとするれば、必ず同胞はこの「敵」の字に注意しなければならない」とのタイトルが掲げられる。ただ、文面は排外主義を煽るものではない。中国は積弱のために事件にさいして公平な判断ができず、衆を集めて騒ぎをおこし、むやみに盲従したが、これは正当なやり方ではなかった。中国では肺病を患うものが多く、「東方病夫」と呼ばれるが、敵痰を用いれば弱を強に転じることができる、とやや強引な宣伝を展開する<sup>(126)</sup>。1925年7月24日の健腦補血米の広告は、「同胞注意、救国与雪恥」とのタイトルのもと、五三〇惨案は同胞の体質が虚弱で「東亜病夫」と呼ばれているのが原因であるとする。もっとも、すべての「病夫」の広告がこのように時事問題を扱っているわけではない。時事問題を「病夫」と関連づけて語ることには、まだある種の新鮮さがあったと思われる。

広告の内容について簡単に見ておこう。「東方病夫」「東亜病夫」の広告は33種660件(人名は除く)で、うち28種633件が薬の広告である。件数が多いのは喘息薬で1種312件だが、種類でいうと滋養強壯薬が16種246件で最も多い。薬以外の広告としては、武術の劇が2種9件、武術会が1種5件、実業が1種11件、靴下が1種2件である。実業も靴下も実業救国の文脈で用いられている。「病夫」の広告もほぼ同様の傾向で、25種215件のうち、薬が20種183件で、薬のうち滋養強壯薬が11種47件を占める。清末にあれほど多かった禁煙薬はほとんど見えない。薬以外の広告はタバコが2種27件、病院の紹介が1種3件、書籍が1種1件、靴が1種1件である。このうち靴の広告(1926年10月21日)は「注意遠東運動会」と大書され、極東大会の栄辱は国体民族に関係すると



図4 五四運動と薬の広告  
『申報』1919年5月18日

して、運動靴を売り込んでいる。タバコは一見、「病夫」言説にそぐわないが、当時のタバコは健康を害するというよりは近代的で男らしいものであった（図5）。「尚武牌」の広告は、このタバコを吸えば、尚武精神を發揮して「東方老大病夫の恥」を雪ぐことができるはずだと宣伝している（図6）。

最後に、「病夫」言説の広がりについて考えてみたい。『申報』で「病夫」言説を含む記事、広告の件数をグラフにすると表11のようになる。1917年に突出して多いのは、182件にのぼる広告のためで、うち111件が広嗣金丹（補腎薬）、58件が哮喘氣急丹（喘息薬）、ともに崔氏瓣香盧



図5 タバコを吸いながらプレイするテニス選手  
『申報』1933年10月10日



図6 尚武牌タバコの広告 『申報』1922年2月14日

が出した広告で占められている。先にも述べたように、件数の多寡だけで「病夫」言説の広がりやを推測するには無理がある。広告の場合は、その言葉がまだ新鮮だから用いるということも多い。また、「病夫」言説が広告の主たるテーマでない場合、いくら数が多くても、それを「病夫」言説の広がりやの証拠とみることが難しい。いっぽう、図7のような広告は、多くの人びとに「病夫」言説を認識させたであろう。

表12は、数量よりも種類に着目し、初出の広告だけを採録して作成した。記事が徐々に増えていくのに対して、広告は年間5件前後で推移していく様子が見えてくる。総数について見ると、表11は広告の件数、表12は記事の件数に大きく左右されるが、ともに1919年から1920年にかけて谷になっている。1921年に「東方病夫」という言葉をもはや耳にすることはないと語った呉退庵の感覚はそれほど的外れではなかったことがわかる。

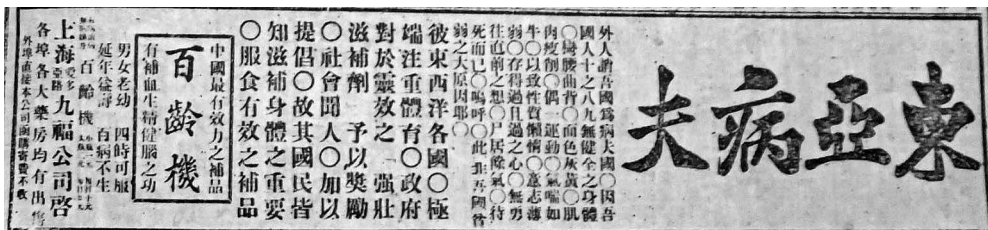


図7 百齡機の広告 『申報』1925年6月9日

表11 北京政府時期「病夫」「東方病夫」「東亞病夫」記事・広告総数

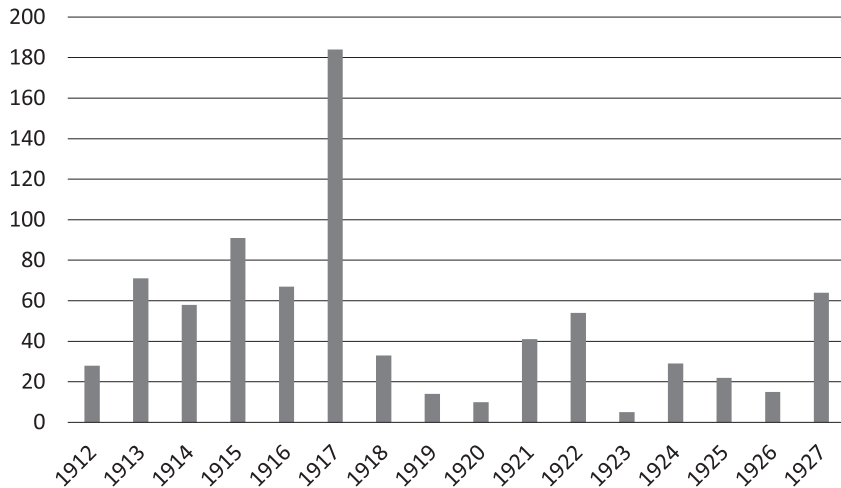
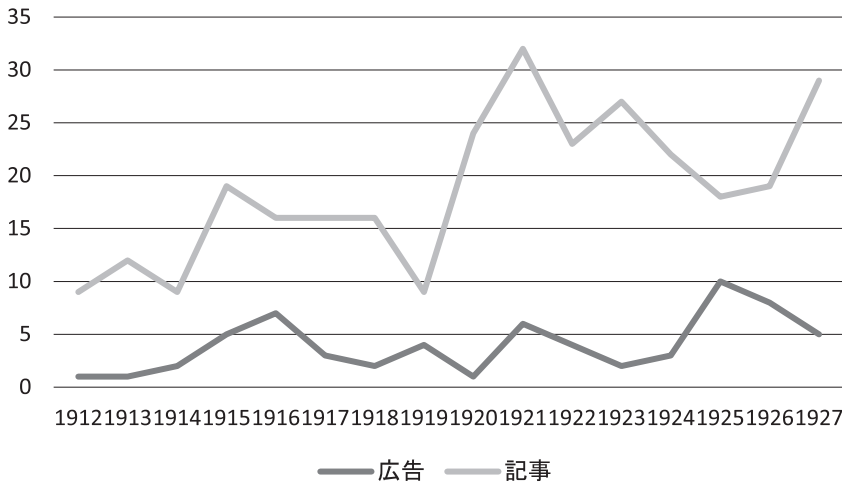




表12 北京政府時期「病夫」「東方病夫」「東亜病夫」記事・初出広告総数



### Ⅲ 南京政府時期の「病夫」言説

#### 1 国術

北京政府時期に武術は精武体育会など民間の団体によって推進されたが、南京政府時期には半官半民の中央国術館によって推進されるようになる。その創設者の一人で初代館長となった張之江は、もともと馮玉祥につかえる武将であった。馮は早くから部下たちに拳術を奨励しており、1921年に「東亜病夫」を克復すべく衛生を重視し身体を鍛錬すべきことを主張していた<sup>(127)</sup>。1927年11月に張は馮のもとを離れて南京に向かい、12月に武術研究館を設立した。そして翌年3月に李烈鈞、戴季陶、蔡元培、何応欽、孔祥熙らと国術研究館（のち中央国術館）の設立を政府に申請して承認された<sup>(128)</sup>。国術研究館の成立大会で発表された宣言には、「国を強くするには必ず先に種を強くし、種を強くするには必ず先に身を強くしなければならない。わが国の国際地位が低下しているのは、「東亜病夫」がその一大原因である」とある<sup>(129)</sup>。張はほかにも不武の国民を尚武の国民に、「病夫」を壮士に、老大な国家を少壮な国家にすることが中央国術館の使命であると述べている<sup>(130)</sup>。張之江や副館長の李景林ら中央国術館の関係者は盛んに「東亜病夫」「東方病夫」を引いて国術の振興を訴えた<sup>(131)</sup>。

国術を支持する政府関係者も「病夫」言説を多用した。たとえば、蔣介石は『中央国術館彙刊』に寄せた序文で「東亜病夫」に言及した<sup>(132)</sup>。また、内政部が拳技国術の提唱を各省に求めた令文は、中国が「病夫」と呼ばれており、国恥を雪ぐには自強を図ることが

必要だと述べている。内政部では毎朝6時から薛篤弼部長が全職員を率いて国術や軍式体操を実践していた<sup>(133)</sup>。1928年10月に中央国術館が主催した国術の全国大会「国考」で、薛部長は「東亜病夫」「老大帝国」に触れつつ、武術の振興が弱を転じて強となす唯一の方法であると語った<sup>(134)</sup>。続いて上海特別市長の張定璠も、日本が武士道によって国民を強健にしたことを引き合いにしつつ、国民の体格が日々低下し「東亜病夫」と誹られている中国は武術を提唱して国家の地位を高めるべきであると語った<sup>(135)</sup>。このたびの国考には、李烈鈞、蔡元培、薛篤弼、王正廷、馮玉祥、何応欽、戴季陶らが役員として参加し、口述試験で三民主義が課されるなど、政府との関係は密接であった。国術館のこのような活動が『申報』で武術に関わる「病夫」言説の数を押し上げることになった。

いっぽうで、『申報』に掲載された武術に関わる「病夫」言説のうち、半数近くは国術館に関係しないものだったことにも留意すべきである。国術館は各地に支部を設置し、その数は1933年までに300以上、その範囲は24省市に及んでいた。それでも国術館による武術の国家化には限界があった。地理的には国民党支配地域に限定されたし、支配地域内でもすべての武術団体を傘下に収めたわけではなかった<sup>(136)</sup>。国術館が武術を自衛や軍事訓練と結びつけたのに対して、それを体育と結びつけようとする人たちもいた<sup>(137)</sup>。その代表人物がフランスで博士号を取得した公衆衛生の専門家で、国民党中央監察委員の褚民誼であった。国術館以外の「病夫」言説は、このような武術界の多様性を反映していた。

像 肖 者 著



格 體 者 著

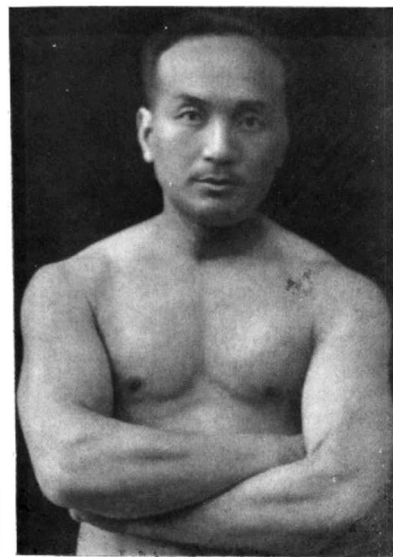


図8 褚民誼 褚民誼『太極操』大東書局、1931年、口絵

褚民誼は、他の武術関係者の例に漏れず、しばしば「東亜病夫」を口にした<sup>(138)</sup>。ここでは国術の国際化に対する彼の貢献について触れておきたい。褚は武術と体操を組み合わせた「太極操」という独自の体操を編み出し、中国国内だけでなく、海外への紹介につとめていた。たとえば、褚はベルギー 100年博覧会で太極操を披露したり、自ら太極操を演じる姿を映画に撮影させベルリン・オリンピックに出展したりした。褚は科学的で中国的な太極操を通して、国際社会における中国の地位を高めようとした。実際、ベルリン・オリンピックの中国選手団で唯一、注目を集めたのが武術の選手たちだった。スポーツと違って勝敗に左右されない武術は、「病夫」を克復する近道であった。実際、褚は『太極操』の自序で太極操を「東亜病夫」の恥を雪ぐ手段であると述べている。同書の巻頭に掲載された褚の2枚の写真は、中国的男性性と近代的男性性を接合しようとした褚の姿をよく示している。

## 2 全国運動会

国民党は北伐によって中国の統一を完成したが、実際にはその後も内戦が頻発し、済南事件、満洲事変など外患も絶えなかった。このような状況のもと、国民党は、国民の教育、なかんずく政治的軍事的教育に大きな関心を払うようになった。体育は個人の健康のためではなく、帝国主義の打倒や国際的地位の回復のような国家目的を遂行する手段と位置づけられていく。南京政府は1929年4月に国民体育法を公布し、体育重視の方針を打ち出した。主管官庁を訓練総監部としたのは、国民体育が軍事目的であったことを明瞭に示している。高級中学以上の学校では、体育と軍事訓練がセットで実施され、卒業に不可欠な単位と規定された（同法第6条）。

1929年7月、浙江省政府主席張人傑は、おりしも開会中の西湖博覧会にあわせて10月に全国運動会を開催したいとの提案を党中央と国民政府に提出した。今回の全国運動会は、中華全国体育協進会が広州で開催することが決まっていたが、張は杭州での開催を強く主張し、蔣介石の支持も取り付け、開催権を譲り受けることに成功した<sup>(139)</sup>。張や蔣が全国運動会の開催に固執したのは、政治的影響力を拡大するためであったともいわれる<sup>(140)</sup>。ならば、なぜ彼らはその手段として全国運動会を選んだのだろうか。張は西湖博覧会の開催にあたって衛生館の設置を強く主張していた。国力を高めるには、工商業を発展させるだけでは十分ではない。軍国民は強兵のためだけでなく、富国のためにも不可欠であった。張が強健な身体を「興国の要素」と考え、体育の提唱のために全国運動会の開催を求めたのは当然であった<sup>(141)</sup>。

こうした考えは、張だけでなく、当時の国民党の指導者にも共有されており、だからこ

そ彼らの多くが全国運動会に関わったのである<sup>(142)</sup>。大会当日の『申報』に寄せた文章で、朱家驊は「わが国はひさしく列強に「東亜病夫」の国家であると嘲笑されてきた」とし、大会の意義を次のように語った。今回の大会は中央政府が決定したもので、いまや国内の軍閥を打倒した以上、次なる目標は帝国主義の打倒であるが、そのためには国民の体格を鍛錬することから始めねばならない。また、訓政時期に入ったいま、破壊よりも建設が重要となるが、それは衰頹した国民ではなしえない、と<sup>(143)</sup>。

今回の全国運動会は、国内の13省6市のほか、香港、神戸から合計1600名以上の選手が参加し、空前の規模で開催された。1930年4月1日の開会式には、蒋介石夫妻をはじめ、党、政府の要人がこぞって出席した。蔣は、「病夫」という言葉は使わなかったものの、今日の世界における中国の地位がきわめて恥ずべきなのは帝国主義者の圧迫のためであるとして、全国運動会は帝国主義、国内の軍閥や反動勢力に対する示威であり、国民革命を完成し三民主義の国家を建設し一切の国恥を洗いさるための手段である、と演説した<sup>(144)</sup>。大会後に開かれた歓迎会では中央研究院総幹事の楊杏仏やベルギー公使の王景岐が体育を通じて「病夫」の汚名を雪ぐよう呼びかけた<sup>(145)</sup>。全国運動会は中国で最も優秀で強健な国民が南京政府のもとにはせ参じて演じた壮大なスペクタクルであった。そこで優秀な成績を取めた選手は、1か月後に東京でおこなわれた極東大会に参加したが、そちらは「完全な失敗」に終わった<sup>(146)</sup>。

第5回全国運動会はもともと1931年10月10日に予定されていたが、満洲事変の勃発で1932年5月に延期となり、さらに第一次上海事変の勃発で再延期され、1933年10月10日ようやく開催されるといういわくつきの大会であった。政府のお膝元である南京に新設された競技場で国慶節にあわせて開催するという点に、南京政府の並々ならぬ熱意を見て取ることができよう。大会の名誉会長に国民政府主席の林森、名誉副会長に汪精衛、蒋介石、



図9 健康美は1930年代の新しい男性性、女性性だった 『芸風』1巻12期、1933年2月1日

戴季陶、宋子文、孫科ら、会長に教育部長の王世杰、副会長に褚民誼らが就任した。

開会式では王世杰の開幕詞、褚民誼の報告、選手代表による宣誓に続いて、蔣介石の電報が紹介された。江西で第5次囲剿の準備を進めていた蔣は、「中国は「病夫」の譏りをまねき、積弱が極まった」とし、体育を弱国から強国に転換する前駆と位置づけた<sup>(147)</sup>。汪精衛、孫科、戴季陶らもそれぞれ挨拶し、体育を通して国難に対処し民族を強化するよう呼びかけた。東北の奪回といった具体的な話がでなかったのは、日本の有吉明をはじめ各国の公使や外交関係者約30名が臨席していたからであろう<sup>(148)</sup>。同日、北平で対日工作に従事していた何応欽も電報を寄せ、体育によって「東亜病夫」の恥を雪ぐことを求めた<sup>(149)</sup>。

総幹事の張信孚は、全国運動会の意義は「民族の健康を促進する」「民族の精神を団結する」「民族の地位を高める」であり、民族の国際上の地位を高めるには、世界的な活動や集会に参加すること、とりわけ明年（正しくは再来年）ベルリンで開かれるオリンピックに参加することが必要で、それによって中華民族を軽蔑する世間の観念を改め「東亜病夫」の恥辱を洗いさることができると述べた<sup>(150)</sup>。強い身体と固い団結を示し、国際的地位を向上させることこそ国民政府が約11万円もの費用をかけて全国運動会を開催した理由であった。蔣介石が大会期間中に共産党に対して第5次囲剿を発動したことからわかるように、全国運動会が「太平を粉飾する」ためでないことは、明らかであった<sup>(151)</sup>。蔣にとって、全国運動会も囲剿も、民族の団結を図るという点で同じ意義を有していた。政府がいかに全国運動会の宣伝効果を重視していたかは、国民党宣伝委員会が、大会終了後ほどなく、『体育与救国』というパンフレットを作成したことにもあらわれている<sup>(152)</sup>。そればかりか、各省市選手団の服装を統一するよう求めたり、大会中に全選手を孫文の墓へ参拝させたりするなど、一貫して全国運動会を政治的パフォーマンスとして演出した<sup>(153)</sup>。国際的地位の向上を掲げていたものの、全国運動会は基本的に内向きのパフォーマンスであり、国際大会と違って中国全体が敗者となることはなかった。それどころか、記録の更新という形で、「東亜病夫」克復の可能性をかいま見せてくれさせた。

全国運動会のニュースのなかで、矢継ぎ早に「記録を打破した」という言葉が聞かれた。結局のところ、〔中国は〕弱くないのだ！なにごとにも「落伍」の中国で、突然これら潑刺と元気に満ちた若者たちが驚くべき成績をあげたことは、どうして人びとを興奮させないでいられよう。少なくとも、この「東亜病夫」のあだ名を徐々に消し去ることができよう。<sup>(154)</sup>

全国運動会ほど全国の各地からたくさんの人を集められるイベントはなかった。体育の

軍事化、国家化を社会の末端まで浸透させる力量を持たない政府としては、全国運動会は高い宣伝効果を期待できる優良な事業であった。しかし、いくら全国運動会を盛大に実施しても、「東亜病夫」の雪辱はできない。極東大会やオリンピックのような国際競技会で実力を認められてはじめてそれが可能となる。1934年の極東大会は惨敗に終わった。この大会で唯一優勝したサッカーも、オリンピック参加の目標は、勝利よりも、「わが国数千年来の東方文化と新時代の青年精神を、全世界の人びとの耳目が集中するオリンピック大会で表現し、外国人が〔中国に対して〕抱く「東方病夫」の悪劣なる心理をぬぐいさること」という控えめなものだった。1936年のオリンピックは陸上競技の符保盧が二次予選に進んだ以外は、惨敗に終わった<sup>(155)</sup>。国際競技会は中国の再男性化を促し、あるいは中国が再男性化を果たしつつあることを示す舞台として不適格の烙印を押され、政府はますます全国運動会を重視するようになった。1933年と1935年の全国運動会にさいして、首都南京と上海に建設された巨大な競技場とそこに集う選手たちは、国民政府が目指した男性的ネイションの象徴であった。

### 3 衛生、新生活運動

近代的な「衛生」概念は、個人の領域をこえて広範な意味——国家権力、進歩の科学的基準、身体の清潔さ、ネイションの健康など——を含むようになっていた。ロガスキーは、近代性と不可分に結びついた「衛生」のあり方を、「衛生的近代性」と呼んだ<sup>(156)</sup>。この新しい「衛生」の言説のなかで、中国はしばしばその欠如が指摘された。「病気は肉体的・道徳的な墮落のしるしであり、文明化の欠如のしるしである。植民地主義の文明化のプロジェクトは、したがって、それがもたらす衛生によって正当化される」というネグリとハートの言葉を裏返せば、衛生は文明化のしるしであり、ネイションの健康のしるしということになる<sup>(157)</sup>。衛生的近代性において、中国（人）の衛生の欠如は、中国（人）の自治能力の欠如を意味した。衛生と主権の間に密接な関係があることは、アンダーソンがアメリカのフィリピン支配を検討するなかで示している。フィリピンで支配者と被支配者を区別し、前者による後者の支配を正当化したのは、ほかならぬ衛生であった<sup>(158)</sup>。ここに、「病夫」である中国（人）にとって、衛生（をそなえていると列強に認められること）が再男性化（≒近代化、文明化）の主たる方法として浮かび上がってくる。

実際、清末から衛生は強種強国の手段として重視されてきた。梁啓超が「論尚武」で「病夫」の原因としたのも、衛生の軽視と運動の不足であった。もっとも、感染症やアヘンを別にすると、衛生は国家ではなく個人の問題として議論されることが多かった。前述したように、北京政府時期の衛生に関する「病夫」言説はもっぱら個人に焦点を当てていた。

公衆衛生の概念は知られていたが、現実には衛生は個人や社会に委ねられていた<sup>(159)</sup>。

政府が衛生問題に本格的に取り組むのは南京政府時期になってからである。それに先立ち、広州市は衛生局を設置し、『衛生雑誌』を刊行していた。1925年の同誌創刊号で衛生教育股主任の余世武は、衛生の欠如を「東方病夫」の原因とみて、衛生の向上により「病夫」の恥を雪ぐことを提起した<sup>(160)</sup>。南京政府は1928年にさっそく衛生部を設置した。初代衛生部長の薛篤弼は衛生行政会議で、「外国人はつねに中国を「東方病夫」「老大中国」と呼んでいるが、中国人が衛生を重視しないためにこのような譏りが生まれるのだ」と語っている<sup>(161)</sup>。

『申報』に掲載された医薬・衛生関係の「病夫」言説を見ると、武術や体育と同様に、政府関係者の発言が目立つ。政府が衛生を国家化し、政府関係者がたびたび「病夫」言説を用いることで、『申報』に多くの「病夫」言説が掲載されることになった。また、公衆衛生への関心が高まるなかで、衛生に関する雑誌が次々と発刊された。1929年創刊の『医薬評論』はそうした雑誌の一つである。褚民誼はその創刊号に発刊の辞を寄せ、「そもそも人はだれが健康を欲しないだろうか。だれが甘んじて「病夫」となることを願うだろうか。外国人が我々を「東亜病夫」というのは、われわれが本当に「東亜病夫」だからだろうか」と問いかけ、民衆の思想の科学化、社会の衛生化、医薬の科学化を追求し、「東亜病夫」を「少年壯士」に変えることを同誌の目標として掲げた<sup>(162)</sup>。

この時期の『申報』に掲載された医薬・衛生に関する「東方病夫」「東亜病夫」の記事を分類してみると、40件中、アヘンが8件、衛生運動が7件、結核が6件（うち1件は衛生運動と結核の両方に関わる）を占めている。以下、この3項目について検討したい。

アヘン関係の記事が多いのは、1929年から1930年にかけてと1935年である。南京政府は1928年8月に禁煙委員会を設置（委員長は張之江）、同年11月に全国禁煙会議を開催し、翌年7月に修正禁煙法を公布するなど、アヘンの禁絶に向けて積極的な施策を展開していた。ところが1931年に政策を転換し、中華民国拒毒会（1924年設立）を弾圧するにいたった。その背景には、軍閥だけでなく、中央政府の官僚までもがアヘン売買に関与し、アヘンが彼らの資金源になっていたことが挙げられる。1934年、蔣介石が兩年禁毒、六年禁煙の計画を提出したことで、アヘン政策は再び転換した。1935年の『申報』に3件のアヘンに関する「病夫」言説の記事が掲載されたのはその結果である<sup>(163)</sup>。衛生が国家化されたことで、政府の姿勢が「病夫」言説の多寡に直接影響を及ぼすことになったのである。

ただ、衛生の国家化は短期間の現象に終わった。衛生部は1928年に設置されたが、1930年に廃止され、1931年に内政部衛生署に格下げされる形で復活した。政府は衛生の必要性を理解していたが、それを実施する資金、人材に欠いていた。しかしながら、衛生の必要

性が認められたことで、民間組織の活動は活発化した。たとえば、肺結核予防を目指す防癆協会は1933年に設立された。翌年に創刊された『防癆雑誌』の発刊のことは譚世鑫（湖南肺病療養院）は結核予防の法律を採用し、公衆衛生を提唱して、肺結核の患者を減らせば、「病夫」の恥を雪ぐことができる、と述べている<sup>(164)</sup>。

上海では民間組織と政府が協力してたびたび衛生運動が実施された。その嚆矢はYMCAが組織した衛生運動に求められる<sup>(165)</sup>。1928年、上海特別市政府の主催による第1回衛生運動大会が開催された。上海特別市長の張定璠は開会の辞で「東方病夫国」に言及した<sup>(166)</sup>。1934年の衛生運動では防癆に重点が置かれた。「上海市第十三届衛生運動大会敬告民衆書」は肺結核の国別統計を掲げたうえで、中国の状況の深刻さは、日本軍の飛行機の爆撃や日本の海軍の海上封鎖にも勝るほどで、すみやかに対処しないと「東亜病夫」の譏りを雪ぐことができなばかりか、民族の存続の機会も断たれかねないと警告する<sup>(167)</sup>。「病夫」言説の広がりを考えるうえで興味深いのは、この衛生運動にあわせて開催されたイベントで、女優の胡蝶が「東亜病夫」に言及していることである<sup>(168)</sup>。この時点で、「東亜病夫」は人口に膾炙していたと断言してよいだろう。

1934年の衛生運動は、同年2月に蒋介石が発動した新生活運動の影響を強く受けていた。新生活運動は伝統思想、ファシズム、キリスト教、日本の軍隊などを思想的背景に持ち、近代的国民の創出により国家と民族の復興を目指す運動であった<sup>(169)</sup>。初期の新生活運動は清潔と規矩を強調し、健全な身体と規律ある精神をもつ国民の育成を図った。新生活運動を「身体美学」という観点から分析した深町英夫が詳述したように、孫文は中国人に対する外国人のまなごしを強く意識し、「西洋の基準に則って自己の身体的美観に留意することにより、外国人の自己に対する心証を改善し、ひいては中国の国際的地位を高め」ようとした<sup>(170)</sup>。蒋介石は孫の「身体を躰ける政治」を継承し、新生活運動として実践に移した。このような経緯を考えると、新生活運動をめぐる言説に、外国人のまなごしそのものである「病夫」言説が持ち出されるのは不思議ではない。蔣は1934年3月26日に南昌でおこなった講演で、新生活運動を提唱するのは、半死半活や不死不活の生ける屍ではなく、元気潑刺とした「活人」、現代の生存に適した新国民となり、「遠東病夫」「老大帝国」の奇恥大辱を雪ぎ、わが国家、わが民族や祖先のために無念を晴らす」ためだと説明している<sup>(171)</sup>。

1935年2月、蒋介石は国民生活の「軍事化、生産化、芸術化」を新生活運動の新しい目標に掲げた。さらに同年9月に蔣は新生活運動を「軍国民教育を実施するための最も初歩的な条件」と位置づけた。新生活運動が創出しようとした近代的国民とは、清末に提唱された「軍国民」だったわけである。



南京政府は早い時期から軍国民の養成に取り組んでいた。1928年5月3日の済南事件を受け、高級中学以上の学校に軍事訓練が導入された。上海特別市長の張定璠は学校の代表を集めた茶話会で、「東亜病夫」に言及しつつ、体育、とくに軍事教育の重要性を強調した<sup>(172)</sup>。1934年6月に挙行された軍事訓練の総検閲には上海市内の36校、約4000人の学生が参加した。会場には「検閲武装、健児期奮闘図強、掃尽病夫羞辱」などのスローガンが掲げられていた<sup>(173)</sup>。この時点で軍事訓練を受けた学生は全国で3万人弱にすぎなかった。軍事訓練の数的不足を補うのが公民訓練（壮丁訓練）であった。中国人男性は、前年に公布された兵役法で兵役の義務を課されており、学校に在籍しない男性が公民訓練を受けることになっていた。上海では市政府に公民訓練処が設置され、18歳から35歳の男性市民（病人や障害者、学校在籍者などを除く）を対象に、通常の労働時間外に3-4時間、合計3か月間の公民訓練が実施されることになり、1936年8月に第1期の約4500人が訓練を修了した。卒業式に出席した上海特別市長の呉鉄城は挨拶のなかで、公民訓練の目的は体魄の強化と規律を守る習慣の養成にある、と述べた<sup>(174)</sup>。公民訓練の目的が新生活運動の目的と一致しているのは偶然ではない。南京政府は新生活運動を通じて日常生活のなかで清潔、規律の習慣を身につけさせ、その基礎のうえに一般人対象の公民訓練と学生対象の軍事訓練を実施したのである。第2期の卒業式は同年11月に挙行され、約8000人の卒業生を送り出した。式典の挨拶で呉市長は「東方病夫」に、訓練総監部国民軍事教育処長の杜心如は「東亜病夫」に言及している<sup>(175)</sup>。

南京政府が衛生を推進した目的は、多数の軍国民を創出し、民族、国家の復興を実現することにあった。体育や武術も同様の目的のもとに推進されていた。つまり、これらはみな国民形成、すなわち、「バラバラの砂」や「病夫」のような人びとを、強健で規律化され南京政府への忠誠心にあふれる軍国民に仕立て上げるプロジェクトの一環だった。「病夫」言説は、人びとに自己の身体の欠陥を認識させ、たえざる自己点検と自己鍛錬へと駆り立てた。しかも、たんに駆り立てるだけでなく、こうした自己点検や自己鍛錬を南京政府の主導する民族、国家の復興という目標へと方向づけした。要するに、南京政府は否定的自画像を通して人びとの身体や日常生活を政治化し、国家化しようとしたのである。こうして人びとは日常生活のふるまいの一つ一つに民族や国家を感じとり、中国の国際的地位に思いを馳せるよう促された。その原動力となったのが「病夫」言説であり、また恥の感覚であった。

南京政府、とりわけ蒋介石は恥にこだわった。済南事件で日本に屈辱的な譲歩を余儀なくされた蔣は、1928年5月10日以降、日記に「雪恥」と綴り続けた。蔣にとって「雪恥」の手段は、励己、励民、強軍、整党であり、自らの行動に厳しい要求を課すと同時に、国

民にも「発強剛毅」「舍私全公」の資質を養成するよう求めた<sup>(176)</sup>。また蔣は国恥教育を重視し、南京政府のもとで国恥記念日は国家行事となった。恥は南京政府の政治文化となり、「病夫」言説はその不可欠の要素となったのである。もっとも、南京政府による国民形成の試みが大きな成功を収めることはなかった。中国は国民形成を成し遂げられないまま、日本との戦争を戦わなければならなかった。

#### 4 日中戦争時期

日中戦争に前後する時期の『申報』の新しい特徴として、子供を対象とする／子供による「病夫」言説が挙げられる。巴玲「非常時期的児童生活」(1936年6月28日)は、児童を「国家の根苗」「国家の棟梁」と位置づけ、彼らに「東亜病夫」の侮辱を雪ぐべく身体を鍛錬するよう求めた。巴玲が親に語りかけたのに対し、嚴懋徳「鍛錬如鉄般的体魄、纔能雪恥！」(1937年1月31日)は、「子供たちよ(小朋友們)」と、平易な文章で身体鍛錬の重要性を子供に語りかける。徐懋徳「怎樣準備援助前方将士」(漢口版、1938年4月3日)も身体を鍛錬して雄々しく意気高らかな「壯漢」となることで、「病夫」の名が消え、前線の兵士を援助することができることを主張する。樊景福「小先生」(1938年12月4日)は衛生によって身体を健康にし、「東亜病夫」の恥を雪ぐよう子供たちに促した。この記事に応えたと思われるのが、王文江「不做東亜病夫」(1938年12月18日)である。王は民智小学の5年生で、中国人は衛生に注意しないために外国人に「東亜病夫」と罵られているとして、衛生を重視しようと呼びかけた。子供の言説の登場は、『申報』に児童欄が設置されたことと関係がある<sup>(177)</sup>。また、戦時体制が強化されるなかで、子供の健康に対する関心が高まったことも要因の一つであろう。

戦争は肯定的な文脈で用いられる



図10 1930年代にはじまったボディビルは戦時中も盛んだった 『健与力』1巻2期、1939年2月

「病夫」言説を生んだ。1938年に陳独秀は「抗戦一年」という文章で、この一年が中国の歴史上最も光栄で最も価値ある一年であり、軍事的に有為な大力士（日本）は一年かけても「病夫」（中国）を倒すことができず、「病夫」は以前想像されていたような容易に屈服する民族でないことがわかったと述べる<sup>(178)</sup>。華北で戦闘を指揮していた彭徳懐は、人民の民族的自尊心、抗戦勝利への自信、困難を克服する毅力を向上させることを抗戦の対策に挙げた。中国人はこれまで帝国主義の侵略のもとで民族的自尊心や自信をなくし、「東亜病夫」「劣等民族」などと言われてきたが、実際には優秀な民族であり、誇るべき優秀な事蹟も数多く持っている、と<sup>(179)</sup>。肯定的自画像のもとで民族の結集を図ろうとした彭にとって、「東亜病夫」は中国の過去の姿でしかなかった。ここで挙げた二人が（元）共産党員であることは偶然ではなかろう。共産党と「病夫」言説の関係については稿を改めて論じたい。

『申報』が日本軍の統制下に入ると、「病夫」言説はこれまでとすこし違ったトーンを帯びようになる。1943年1月、汪精衛政権による対英米宣戦を受けて、これを支持する民衆大会が上海で開かれた。大会主席の袁履登は、中国は過去何百年にもわたって欧米人の圧迫、侮辱を受け、「睡獅」「東亜病夫」と嘲笑されてきたとし、大東亜戦争への参加を決めた政府への協力を呼びかけた<sup>(180)</sup>。「病夫」をめぐる対抗関係が、中国対帝国主義から日本を盟主とする大東亜民族対白人へと組み替えられたのである。同じことはアヘンについても言え、アヘンはイギリスの横暴の象徴となった<sup>(181)</sup>。ボクシングは人気のあるスポーツではなかったが、在華外国人選手になんども勝利したボクサーは「東亜病夫」の侮辱を雪いだと見なされた<sup>(182)</sup>。

戦争は体育、衛生の重要性を高める。その重点は全国運動会や国考のような全国レベルの競技会ではなく、国民体育の推進に置かれた。福建で戦闘を指揮していた第25集団軍総司令の陳儀は、1940年の閩北体育表演会にさいしての訓示で、中国人の健康が外国に比べて劣っているのは衛生や体

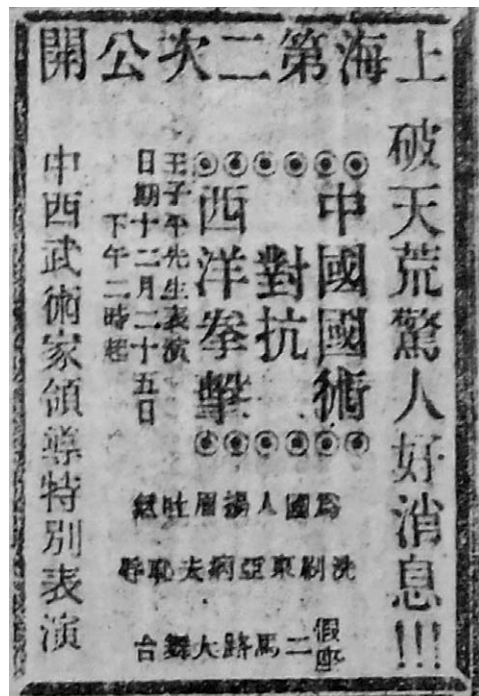


図11 国術とボクシングの対抗戦  
『申報』1943年12月24日

育を重視しないからで、それゆえ「東亜病夫」と譏られていると述べた<sup>(183)</sup>。2年後、同じく福建だが、日本軍の支配下で刊行されていた雑誌には、中国の道徳と衛生はかつて素晴らしかったが、アヘン戦争で敗れ不平等条約を締結してから、執政者は萎縮し、人民は悪習に染まり、「東亜病夫」の譏りが生まれたとする記事が見える<sup>(184)</sup>。先述の民衆大会と同様に、中国の「病夫」化に日本が加担したことは触れられない。汪精衛政権で教育部社会教育司長をつとめていた趙如珩は、中国では40年余りにわたって体育を提唱してきたが、腰や背が曲がったもの、病気で夭逝するものが至るところにおり、「東亜病夫」の恥辱はいまだ雪けていないとする<sup>(185)</sup>。1943年度の重慶市体育協進会工作報告書は、「東亜病夫」に触れながら、戦後の建国の目標である工業化のために、体育運動は不可欠の要素であると述べている<sup>(186)</sup>。このように、「病夫」言説は重慶政府でも南京政府でも用いられた。

1943年に重慶政府と南京政府は相次いで不平等条約の解消に成功する。不平等条約は中国を「病夫」化した元凶であったが、それが撤廃されても「病夫」言説が消えることはなかった。中国では依然として肯定的な自画像による国民形成が困難だったからである。もっとも、1943年に蒋介石の名で刊行された『中国之命運』は国恥の由来を延々と叙述しながら「病夫」に触れない。同書でしばしば言及されるのは「散沙」である。自由を享受するバラバラの中国人像を提示することで、蒋介石は国民に（自由を放棄して）国民党に協力し、（共産党ではなく）国民党の指導のもとに団結するよう求めた。

## 5 『申報』の分析

まず記事の分析からはじめよう。前期（1928–1936年）は、「東方病夫」が30件、「東亜病夫」が125件である。内訳は、「東方病夫」が医薬・衛生20.0%、体育23.3%、武術20.0%、その他36.7%、「東亜病夫」が医薬・衛生27.2%、体育32.0%、武術16.0%、その他24.8%となっている。北京政府時期には「東方病夫」が身体と強く結びついていたのに対して、南京政府時期は「東亜病夫」のほうが身体との結びつきが強くなっている。数量的にも両者は完全に逆転している。数量的にも、内容的にも、「東亜病夫」は「東方病夫」に取って代わったといえる。その他の項目で目立つのは抗日関係の記事で、軍事はもちろんのこと、国貨運動や工業振興など経済に関するもの、尚武精神の高揚など国民性に関するものなどがある。記事の数は年平均17.2件で、北京政府時期の年平均5件を大きく上回っている。

後期（1937–1949年）は、「東亜病夫」が56件、「東方病夫」が5件で、両者合わせた年平均4.7件は前期に比べて大幅な減少である。内訳は、「東亜病夫」が医薬・衛生50.0%、体育30.4%、武術3.6%、その他16.1%、「東方病夫」が医薬・衛生が80.0%、体育が20.0%

である。衛生と体育の比重が非常に大きいのが特徴である。言うまでもなく、これは戦争と関係があり、衛生や国民体育により最低限の健康を維持することが緊急の課題となったからである。1942年以前の記事は、香港のスポーツ（香港版）、孤軍営運動大会、防痲運動、児童保健院（香港版）の記事をのぞくとすべて投稿記事である。日本軍の統制下に入ると投稿記事は少なくなるが、1946年以降は投稿記事がふたたび増加し、7割以上を占める。投稿記事が多いのは、この時期の「病夫」言説が主に民間人によって担われていたことを意味する。

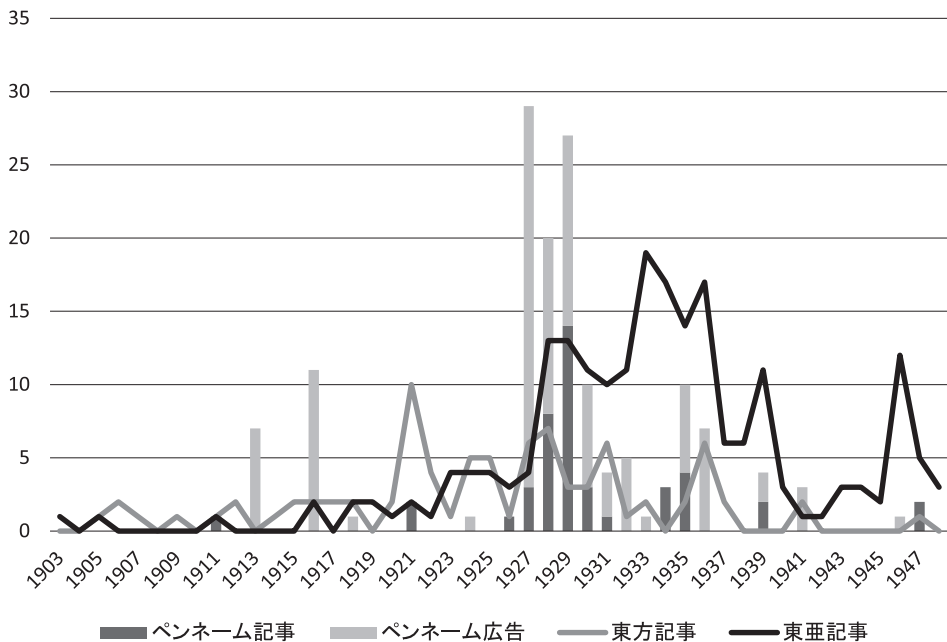
次に広告だが、数が少ないので、前期と後期を合わせて論じる。最大の特徴は、件数の激減である<sup>(187)</sup>。「東亜病夫」の広告は27種58件、「東方病夫」の広告はわずか11種14件しかない。「東方病夫」「東亜病夫」の広告の年平均件数は北京政府前期が57.4件であったが、同後期が20.4件、南京政府前期が7.5件、同後期が1.2件である。南京政府時期、「病夫」言説の記事は大幅に増加したが、広告のほうはそれに反比例して減少したことになる。「病夫」言説が新鮮味を失い、広告に用いるメリットが少なくなったからであろうか。広告の内訳は薬が最も多く、「東亜病夫」で23種45件、「東方病夫」で6種6件である。広告全体に薬の広告が占める割合は北京政府時期が種類で84.8%、件数で95.9%だったが、南京政府時期は種類で61.7%、件数で62.2%と大きく低下している。薬以外の広告には、自転車、靴、武術、劇・映画、雑誌記事のタイトルなどがある。劇・映画の広告は3種あるが、2種は武術、1種はアメリカ海軍を素材にしている。

ここで、本稿の出発点となった「東方病夫」が「東亜病夫」に変化したのはなぜかという問いに立ち戻ろう。この問題についてはすでに蘇全有が初歩的な検討を加えている<sup>(188)</sup>。蘇はこの変化を、もう一つの「東方病夫」であるトルコが1923年以降、ケマル・アタテュルク大統領の一連の改革によって「東方病夫」でなくなったために、「東亜病夫」と中国の結びつきが強まった結果であると推測する。さらに、1920年代以前の「東亜」がひろくアジアを指すものであり、今日のようにアジアの東部を指すものではなかったことも理由に挙げる。この解釈は以下の点で承服できない。まず、トルコが「東亜病夫」と呼ばれる事例が存在し、しかも1938年の時点でさえ「東亜には二つの病夫がある。一つは「遠東病夫」と呼ばれる中国で、一つは「近東病夫」と呼ばれるトルコである」という記事を『申報』に見出すことができるからである<sup>(189)</sup>。そもそも、孫文の「Sick Man of the Far East」が「東方病夫」「東亜病夫」の二通りに訳されたことが示すように、両者が明確に使分けられていたとは考えにくい。一つの文章で両者が用いられる場合もあるし、曾樸のペンネーム「東亜病夫」が「東方病夫」と誤って書かれることさえあった<sup>(190)</sup>。蘇の議論の最大の問題は、なぜ1928年に「東亜病夫」が急増したかを説明できていない点にある。ケマ

ルの改革が始まったのは1923年である。そして、トルコがもはや「東方病夫」を脱したという言説が『申報』にあらわれるのは1930年代に入ってからである。

ではなにが原因として考えられるだろうか。筆者の推測では、ここまで考察の対象から外してきた曾樸のペンネームが関係している。表13は、ペンネームとして使われた「東亜病夫」の記事と広告の件数を表3に棒グラフで加えたものである。曾樸は1905年に『孽海花』の初集（1-10回）と2集（11-20回）を刊行し、1907年に雑誌『小説林』に21-25回を連載、1916年に3集として21-24回分を刊行している。辛亥革命後は基本的に官僚生活を送っていたが、1927年に上海に真美善書店を開き、雑誌『真美善』を刊行して、文学活動を再開した。『真美善』には小説『孽海花』の改訂版と続編が連載され、1931年に30回本の『孽海花』が出版された。表13の棒グラフは、このような曾樸の文学活動の軌跡にほぼ対応している（曾は1935年に亡くなる）。とりわけ1927年から1929年にかけて、「東亜病夫」のペンネームは『申報』に頻繁に登場している。この時期の曾樸の活躍が、「東亜病夫」への転換を促したのではないだろうか<sup>(191)</sup>。もっとも、このような推測に対しては、なぜ清末に『孽海花』が人気を博したさいに「東亜病夫」への転換が起らなかったのかという反論が予想される。筆者は、清末には「病夫」言説が南京政府時期ほど普及していなかったために混線が生じなかったと考えている。

表13 「東方病夫」「東亜病夫」記事とペンネーム記事・広告の件数比較



最後に、女性に関する、または女性による「病夫」言説に触れておきたい。1928年の江蘇省の中等学校連合運動会ではじめて女性の競技が採用されたことに関して、これを見学した記者は、女子は「国民の母」であり、体育を重視しないならば、「東方病夫」の恥をどうすることもできないとの感想を残している<sup>(192)</sup>。1937年にYWCAが国術班を組織したさいの報道にも「東亜病夫」の恥への言及がある<sup>(193)</sup>。女性による「病夫」言説もいくつか見られる。1931年10月1日に上海で婦女救国大同盟が結成された。主催者の一人、劉王立明は、「これまで婦女界は国是に預かってこなかったが、今日のこの挙は破天荒で、各国がこのことを耳にすれば、「東方の睡獅」が目覚め、「東亜の病夫」が健康になったことを知るだろう」と挨拶した<sup>(194)</sup>。1936年の婦女節特集に寄稿した務本女子中学校長閻振玉は、「東亜病夫」は中国全体について言ったものだが、体格が不健全で軟弱な人は女性のほうが多いとして、女性に身体の鍛錬を呼びかけた<sup>(195)</sup>。女性による「病夫」言説は一貫して身体に関わる文脈で用いられてきたが、南京政府時期には、国民の母にとどまることなく、日貨ボイコットや看護隊の組織などを通じて、従来のジェンダーの壁を打ち破り、女性の活動領域を拡大するためにも用いられたのである。

## おわりに

---

「病夫」言説は中国への干渉を正当化しようとする帝国主義列強と改革を通じて再男性化を図ろうとする中国の同床異夢のもとで成立した。それは、恥の感覚に訴えることで、中国の女性化を認識させ、再男性化へと駆り立てる役割を果たした。当初の「病夫」言説は、変法を求める知識人によって用いられ、その働きかけの対象は政府であった。彼らが想定した再男性化の手段は、外交、教育、軍事など幅広い分野にわたり、必ずしも身体と結びついてはいなかった。つまり、西洋での使われ方と大きな違いはなかったといえる。

義和団事件後、清朝に失望した知識人は改革の力点を政府から国民に移す。具体的にいえば、臣民を国民に転換することが彼らの目標になった。彼らが目指した国民とは、強健な身体と忠誠心をそなえた規律正しい「軍国民」である。「病夫」とは軍国民の鏡像であった。「病夫」言説は国民ひとりひとりに国家の恥を自らの恥と感じ、その恥を雪ぐために努力するよう求めた。こうして「病夫」言説は、恥の感覚を通じて、国民と国家を結びつけた。恥を雪ぐために国民がなすべきことのひとつが身体の強化であった。国民の精神と身体が中国の再男性化の手段となることによって、「病夫」言説は身体性を獲得した。ただし、国民が忠誠を尽くすべき対象は、立憲派にとっては清朝であり、革命派にとっては（まだ現存しない）新しい共和国であった。逆にいえば、再男性化の主体を「中華民族」と考えるも

のも、「漢族」と考えるものも、軍国民によって構成される近代的な国民国家を目指す点では一致していたのである。ただし、清末の時点では身体と結びつかない「病夫」言説のほうが多かった。楊のいう「創造転化」のプロセスは短期間で完成したわけではなかった。

辛亥革命によって新しい共和国が成立したものの、政治は混乱の度を深め、中国の再男性化はいっこうに進展しなかった。それどころか、21か条要求受諾というさらなる屈辱を重ねることになった。それから4か月後、陳独秀が『青年雑誌』を刊行した。陳は混迷する政治から距離を置き、将来の希望を青年に託した。こうして再男性化の対象はふたたび国民に向けられ、「病夫」言説は身体との結びつきを強めていった。北京政府時期にはこのように民間の知識人を担い手とする「病夫」言説が主流となった。いっぽう、広告に目を向けると、清末以来、「病夫」言説を含む広告が大量に掲載されていた。広告は「病夫」言説を知識人のサークルの外に押しひろげる役割を果たしたであろう。

南京政府時期には政府が「病夫」言説の主たる担い手となる。南京政府は体育、武術、衛生を奨励し、男子学生には軍事訓練、男子国民には公民訓練を課すことで、強健で国家に忠誠を尽くす規律正しい国民を養成しようとした。南京政府が身体を問題化したのは、数ある再男性化の手段のなかで、(産業の育成や軍備の強化などと違って)資本や専門の人材をあまり多く必要とせず、比較的簡単に解決(=治療)が可能だったからであろう。「病夫」言説はこうした取り組みを正当化し、促進する役割を担うなかで、身体性を増していった。しかし、南京政府はネイションを恥の共同体に作りかえることに成功しないまま戦争を戦わねばならなかった。別稿で論じたように、これは南京政府が軍事的男性性の確立に失敗したことを意味する<sup>(196)</sup>。こうして国民形成のプロジェクトは中華人民共和国へと引き継がれた。

最後に指摘しておきたいのは、肯定的な文脈で用いられる「病夫」言説が存在したことである。「病夫」言説そのものは、否定的な自画像から出発していたが、なんらかの形でその克服が示されれば、肯定的な自画像と容易に結びつくことができた。このような現象は、中華人民共和国成立以前の中国でも、スポーツのように他者との勝敗が明白に決まる分野で観察することができる。それは中国の国際的地位を総体として改善するものではなかったが、対外的「勝利」は少なくとも一部の人びとに希望と自信を与えることができた。スポーツのこのような特性は、中華人民共和国における「病夫」言説を考えるうえで重要なポイントとなるであろう。中華人民共和国で「病夫」言説がどのような道筋をたどって今日の「病夫」言説にいたったのかについては、稿を改めて論じたい。



註

- (1) 李小竜主演の『精武門』は1972年に製作された。1995年には甄子丹主演の『精武門』が製作され、「東亜病夫」のシーンはよりドラマティックに演出された。武術と映画の関係については、Lu Zhouxiang, Qi Zhang and Fan Hong, "Projecting the 'Chineseness': Nationalism, Identity and Chinese Martial Arts Films," *The International Journal of the History of Sport*, vol. 31, no. 3, February, 2014を参照。なお、『人民日報』では「東亜病夫」と武術の関わりはきわめて稀薄である。
- (2) 楊瑞松『病夫、黄禍与睡獅：「西方」視野の中国形象与近代中国国族論述想像』政大出版社、2010年。
- (3) Arif Dirlik, *The Postcolonial Aura: Third World Criticism in the Age of Global Capitalism*, Westview Press, 1997.
- (4) 拙稿「「東亜病夫」とスポーツ：コロニアル・マスキュリニティの視点から」狭間直樹・石川禎浩編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』京都大学人文科学研究所、2013年。
- (5) ほかに、「亜東病夫」「中華病夫」「遠東病夫」「亜洲病夫」などが用いられたが、数は少ない。
- (6) 関西大学アジア文化研究センターの『申報』データベースを利用した。『申報』が本研究に最適のメディアかどうかは議論の余地があるが、『申報』のデータベースは現在研究者が利用できるものとしては最良のものの一つであり、かつこれだけの長期間にわたって観察することができるほぼ唯一のメディアである。本稿では『申報』というメディアの限界を認識しつつ、分析を進める。
- (7) このほか「図片庫」もあるが、数量的に無視しうる程度なので、本稿では考察対象から外した。
- (8) データベースでは単語数が出てくるが、本稿では記事、広告の件数で計算する。1件の記事に「東方病夫」「東亜病夫」の両方が出てくる場合はそれぞれで1件と数える。また1件の記事に「東方病夫」「東亜病夫」と「病夫」の両方が出てくる場合、「東方病夫」「東亜病夫」として数える。「東方之病夫」「東亜之病夫」も採録したが、「東方…病夫」「東亜…病夫」は採録していない。データベースの分類の誤り（広告が新聞庫に入っていたり、記事が広告庫に入っていたりする）は適宜訂正した。OCRのミスで、「東亜病夫」が「軍亜病夫」、「東方病夫」が「京乃病夫」などと認識されているような場合（徐相宸『集益録』『申報』1917年12月26日、「慰勞爭先恐後」『申報』1932年2月2日）は件数に入れていない。以上の基準は正確さと検証の容易さを両立させるための措置である。なお、「病夫」については、「病」と「夫」の間で句読点が入るものは除去している。
- (9) 「病夫」は、「東方病夫」「東亜病夫」の事例が少ない北京政府時期以前についてのみ考察対象とする。
- (10) 分類は1件の記事に1つの項目が対応するようにした。1件の記事が複数の項目の内容を含む場合、身体に関する項目を優先する。身体に関する項目では、①体育、②武術、③医薬・衛生の順で優先する。
- (11) John Brookes, *Manliness: Hints to Young Men*, cited in Sikata Banerjee, *Muscular Nationalism: Gender, Violence, and Empire in India and Ireland, 1914-2004*, New York University Press, 2012, p. 21.

- (12) Mrinalini Sinha, *Colonial Masculinity: The 'Manly Englishman' and the 'Effeminate Bengali' in the Late Nineteenth Century*, Manchester University Press, 1995; 拙稿「『東亜病夫』とスポーツ」コロニアル・マスキュリニティの視点から」。筆者の男性性に対する考え方については拙稿「中国近代の男性性」小浜正子・下倉渉・佐々木愛・高嶋航編『中国ジェンダー史研究入門』京都大学学術出版会（近刊）を参照されたい。
- (13) 梁啓超「論商業會議所之益」『清議報』21冊、1899年7月18日；同「中国魂安在乎」『清議報』33冊、1899年12月23日。言うまでもなく、武士道は本来、主従関係に限定されたものであった。
- (14) 孫文『三民主義』民族主義第一講（広東省社会科学院歴史研究室、中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室・中山大学歴史系孫中山研究室合編『孫中山全集』9巻、中華書局、1986年、185頁）。
- (15) ここで注意しておきたいのは、ある社会で男性性が強く意識されるのは男性性が危機に瀕していると感じられるときであり、アレンが言うように、男性性は本質的に「危機と結びつくことで形成される」（Judith Allen, “Men Interminably in Crisis? Historians on Masculinity, Sexual Boundaries, and Manhood,” *Radical History Review*, no. 82, 2002）。このことは帝国主義国家でさえ例外ではなく、たとえばイギリスではクリミア戦争やボーア戦争がその契機となった。
- (16) Joane Nagel, “Masculinity and Nationalism: Gender and Sexuality in the Making of Nations,” *Ethnic and Racial Studies*, vol. 21, no. 2, March 1998.
- (17) ジョージ・L・モッセ著、細谷実・小玉亮子・海妻径子訳『男のイメージ：男性性の創造と近代社会』作品社、2005年。
- (18) Sikata Banerjee, *Muscular Nationalism*, p. 16.
- (19) Sikata Banerjee, *Muscular Nationalism*, p. 56. インド人は裸足でサッカーをしたので、サッカーはインド化していると主張できた。
- (20) インドの伝統的身体文化であるヨガは近代化、国際化の過程でインド（人）の男性化に貢献したが、西洋では女性の体操として受け入れられた。ここにもコロニアル・マスキュリニティを見てとることができよう。マーク・シングルトン著、喜多千草訳『ヨガ・ボディ：ポーズ練習の起源』大隅書店、2014年は近代ヨガ史のタブーに挑戦した興味深い研究である。
- (21) 史書明はこのことが総体として西洋的近代化への抵抗を緩和したと主張する（Shumei Shih, *The Lure of the Modern: Writing Modernism in Semicolonial China, 1917–1937*, University of California Press, pp. 34, 373）。
- (22) William A. Callahan, *China: The Pessoptimist Nation*, Oxford University Press, 2010; Zheng Wang, *Never Forget National Humiliation: Historical Memory in Chinese Politics and Foreign Relations*, Columbia University Press, 2012; Jing Tsu, *Failure, Nationalism, and Literature: The Making of Modern Chinese Identity, 1895–1937*, Stanford University Press, 2005; Peter Hays Gries, *China's New Nationalism: Pride, Politics, and Diplomacy*, University of California Press, 2004; Paul A. Cohen, “Remembering and Forgetting: National Humiliation in Twentieth Century China,” *Twentieth-Century China*, vol. 27, issue 2, April, 2002; 楊瑞松『病夫、黄禍与睡獅』58頁。
- (23) Jing Tsu, *Failure, Nationalism, and Literature*, pp. 11, 231, 232. もっとも、「失敗」に重点を

置くあまり、肯定的自画像の役割を評価しないのは問題であろう。

- (24) Cynthia Enloe, *Bananas, Beaches and Bases: Making Feminist Sense of International Politics*, University of California Press, updated version, 2000, p. 44.
- (25) 楊瑞松『病夫、黄禍与睡獅』50頁。
- (26) 嚴復「原強」王栻主編『嚴復集』1冊、中華書局、1986年、13頁。楊瑞松の引用は中国科学院哲学研究所中国哲学史組編『中国哲学史選輯』近代之部下、中華書局、1962年からだが、同書に収める「原強」は1901年に発表された「原強修訂稿」であり、『直報』に連載されたものと論旨に若干の違いがある。
- (27) それゆえ、前稿で指摘したように、蔡鏗でさえ「原強」から身体的重要性を読みとることができなかったのである。
- (28) 改革と結びついた「病夫」の用例はこれ以前にも宣教師の文章に見えるが、中国の知識人がそれを切実に受けとめた形跡はない。「病夫」が問題化される条件が整っていなかったためであろう。
- (29) 楊瑞松『病夫、黄禍与睡獅』32頁。
- (30) 楊瑞松『病夫、黄禍与睡獅』33頁は、この文章を1897年のものとしており、「中国実情」の刊行前であることを見逃している。
- (31) 寿富「知恥学会後叙」『時務報』40冊、1897年9月26日。
- (32) 陳天華『警世鐘』（陳天華著、劉晴波・彭国興編、饒懷民補訂『陳天華集』湖南人民出版社、2008年所収）。
- (33) この点、女子留學生の経験はあまり語られてこなかったのではないだろうか。
- (34) Lydia H. Liu, *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity: China, 1900-1937*, Stanford University Press, p. 46.
- (35) 楊瑞松『病夫、黄禍与睡獅』35頁。
- (36) 26号の「飲冰室詩話」に引く黄遵憲「出軍歌」、27号の「論中国国民之品格」、28号と29号の「論尚武」。
- (37) 狹間直樹編『共同研究 梁啓超』みすず書房、1999年、420頁の表による。
- (38) 「安徽愛国会演説」『蘇報』1903年5月26日。「王陽明先生訓蒙大意的解釈」では、これまで誰も体育を提唱してこなかったために全国の人が優雅で虚弱になり、氣息奄々として生氣を失ってしまったと述べている（『安徽俗話報』1904年11月21日）。いずれにおいても、陳は「病夫」に触れていない。
- (39) 「論青年会体操班事」『蘇報』1903年5月23日。
- (40) 「無錫体育会集捐啓」『蘇報』1903年7月4日。
- (41) 「国民衛生学」『湖北学生界（漢声）』5期、1903年5月27日。
- (42) 前稿でも述べたとおり、梁啓超がこの系譜の唯一の創始者だったかどうかは確定できないが、創始者のなかで最も影響力のある人物だったことは間違いのない。なお、梁は「東方病夫」を身体の意味で用いることはなかったようである。
- (43) 「紀華商体操会開會礼節」『申報』1906年5月21日。
- (44) 拙稿「軍隊と社会のはざま」田中雅一編『軍隊の文化人類学』風響社、2015年。
- (45) 逸仙「支那保全分割合論」『江蘇』6期、1903年9月21日。
- (46) 胡漢民編『總理全集』四集、上海民智書局、1930年、349頁、広東省社会科学院歴史研究室、中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室、中山大学歴史系孫中山研究室合編『孫

- 中山全集』1巻、中華書局、1981年、243, 248頁。なお、同パンフレットについては、武上真理子「孫文とアメリカ独立宣言：『中国問題の真の解決』における「ユートピア」像」『孫文研究』35号、2004年1月；石川禎浩「山口一郎記念賞を受賞して」『孫文研究』44号、2008年9月を参照。
- (47) 汪精衛「革命可以杜絶瓜分之实拠」『中興日報』1908年8月27日-9月2日（汪精衛『汪精衛集』上海書店、1992年所収）。このほか、同書では205頁（民意（汪精衛）「波斯革命」『民報』25号、1910年1月1日）、245頁（「分共以後」（1927年）にも「遠東病夫」が見える。
- (48) ちなみに1896年から1905年の『申報』の統計によると、「東方」は2819回、「東亜」は464回使われている。1906年から1911年は「東方」が4810回、「東亜」が4814回だが、北京政府時期、南京政府時期を通じて「東方」の用例が多く、例外は1942年から1945年にかけてで、これは日本軍の影響のもと、日本語の「東亜」が頻出するためである。
- (49) 竹庄「論中国女学不興之害」『女子世界』3期、1904年3月17日。
- (50) 煉石「本報五大主義演説」『中国新女界雑誌』1907年4期。
- (51) 靈石「生死界与名誉界」『覺民』7期、1904年6月8日；穀生「利用中国之政教論」『東方雑誌』2巻4期、1905年5月28日；吳魂「中国尊君之謬想」『復報』1期、1906年5月8日；鉄崖（雷昭性）「名説」『越報』1期、1909年11月12日。
- (52) 伯「冒險小説片帆影」『中外小説林』2年8期、1908年4月20日。
- (53) 梁啓超「政策与政治機関」『庸言』1巻1号、1912年12月1日；「政府大政方針宣言書」『庸言』1巻21号、1913年10月1日に「病夫」の語が見えるが、文脈上、「病夫」言説とは言えない。
- (54) 「禁煙後之希望」『申報』1907年6月12日。
- (55) 伝統中国で成熟を意味する「老人」は決して否定的なイメージではなかったが、清末の中国人は「老大」を否定的なレッテルとして受け取った。
- (56) 前稿では広告に言及しなかったが、前稿の中国語版が出されるさいに、『申報』データベースの試用版にもとづき、「東亜病夫」の広告がわずかであること、いずれも国家・民族と無関係であることを追記した。しかし、試用版には広告が含まれないこと、たまたまヒットした広告は分類ミスであることが後に判明した。
- (57) 1901年から1910年までの広告45万件のうち、医薬・衛生の広告は13万件で全体の約3割を占めていた（陳妹「晚清上海的医薬文化与社会生活：以1901-1910年『申報』廣告为中心的研究」博士論文、青島大学、2013年）。
- (58) たんに病人という意味であれば、それ以前の広告にも見えるが、数は非常に少ない。
- (59) 脳は伝統医学では重視されなかった。補脳薬の広告は人々の伝統的な身体観を変える媒介となった。張仲民「衛生、種族与晚清的消費文化：以報刊廣告为中心の討論」『學術月刊』40巻4月号、2008年；同「補腦的政治学：“艾羅補腦汁”与晚清消費文化結構」『學術月刊』43巻9月号、2011年；同「“衛生”的商業建構：以晚清衛生商品的廣告为中心」『歴史教学問題』2013年5期；張寧「腦為一身之主：從「艾羅補腦汁」看近代中国身体観的变化」『中央研究院近代史研究所集刊』74期、2011年12月を参照。
- (60) モルヒネ入りの禁煙薬も少なからずあったようである（張寧「腦為一身之主」）。張仲民は薬や広告の真偽よりも、それが映し出す集合心理やそれが置かれた社会的文脈に眼を向けるべきだと説く（張仲民「補腦的政治学」）。
- (61) この広告は、民国期にも継続し（1912年9月19日から1917年7月18日まで312回）、通算

- すると502件で、「東亜病夫」の広告の68%を占める。この広告が「病夫」言説の広がりを与えた影響は過大に評価することはできないだろう。
- (62) 格爾士原牌補腦汁は1907年10月22日、艾羅補腦汁は1909年9月26日、愛理士紅衣補丸は1910年2月15日など。
- (63) 陳妹「晚清上海的医業文化与社会生活」も補薬広告から身体美の変化を指摘する。
- (64) データベースでは10件の広告が新聞庫に分類されている。ここで挙げたのは、分類の誤りを訂正し、単語数を記事数に換算した数字である。なお、『申報』の全時期についていうと、広告の割合は「東方病夫」「東亜病夫」が72.3%、「睡獅」が54.3%、「一盤散沙」が6.1%である。
- (65) 梁啓超著、高嶋航訳注『新民説』平凡社、2014年、355-356頁。
- (66) 梁啓超は「心の奴隷より恥ずかしいことはなく、身の奴隷は末節である」と述べている（梁啓超著、高嶋航訳『新民説』153頁）。清末の奴隷については、金城正篤「清末における『奴隷』・『奴隷根性』論：変革主体の形成との関連で」『琉球大学法文学部紀要』史学地理学、30号、1987年；藤井隆「奴隷、国民、革命：『清議報』から『革命軍』へ」『広島修大論集』人文編、43巻1号、2002年；岸本美緒「清末における「奴隷」論の構図」『お茶の水史学』56号、2013年；石川禎浩「近代東アジアにおける「奴隷」概念」、弘末雅士編『越境者の世界史：奴隷・移住者・混血者』春風社、2013年を参照。
- (67) 蔣維喬「論学堂輕視体育之非」『教育雑誌』1巻6号、1909年7月12日；浮邱「学生体育問題」『教育雑誌』2巻12号、1911年1月10日。
- (68) 「国立武昌高等師範秋季運動会」『中華教育界』3巻23期、1914年11月。
- (69) 呉家熙「參觀江蘇省立学校第二次連合運動會記及感言」『中華教育界』4巻12期、1915年12月。
- (70) 一冰「体育与武力辨」『体育雑誌』1期、1914年6月；同「整頓全国学校体育上教育部文」『体育雑誌』2期、1914年7月；徐一冰「論学校体育」『教育雑誌』6巻10期、1914年12月15日。
- (71) 前者については前稿を参照。後者は鍾瑞秋「徐一冰体育思想初探」『上海体育学院学報』1985年2期が言及する。鍾は典拠を徐一冰「二十年来体操談」『体育周刊特刊』1918年第1号とするが、このような字句は確認できない。最近では、閻登科「近代教育家徐一冰述評」『湖州師範学院学報』37巻7期、2015年7月がこれに言及している。おそらく鍾論文からの孫引きであろう。
- (72) 陳独秀「敬告青年」『青年雑誌』1巻1号、1915年9月15日。
- (73) 陳独秀「今日之教育方針」『青年雑誌』1巻2号、1915年10月15日。
- (74) 陳独秀「一九一六年」『青年雑誌』1巻5号、1916年1月15日。
- (75) 陳独秀「新青年」『新青年』2巻1号、1916年9月1日。
- (76) 陳の言う「新青年」が女性にも開かれていたことは、「男女青年」という言葉から明らかである。
- (77) 毛沢東「体育之研究」は体育界にさしたる影響を及ぼすことはなかった。むしろ、この時期の体育への関心が、無名の一青年を通して表出した事例として興味深い。なお、「体育之研究」には「病夫」は使われていないが、毛の先生であった楊昌濟は1914年に「東方病夫」を用いている（王興国編『楊昌濟文集』湖南教育出版社、1983年、192頁）。
- (78) たとえば高語罕「青年与国家之前途」『青年雑誌』1巻5号、1916年1月15日。

- (79) 朱亮「序一」郭希汾『中国体育史』商務印書館、1919年。
- (80) 同書執筆の背景については、鍾瑞秋「有關中国古代体育史的幾個問題：訪問我国第一部『中国体育史』作者郭紹虞先生紀要」『上海体育学院学报』1980年2期を参照。
- (81) 「叙」『東亜体育学校校刊』1期、1919年。
- (82) 黄醒「講求体育果為「増進」体力者乎？」『体育週報』30期、1919年7月14日；陳奎生筆述「郝伯陽氏的体育講演」『体育週報』40期、1919年10月12日。『体育週報』には『新青年』の広告が掲載されている。
- (83) 徐如玉（文科三年級学生）「組織運動會之起因及今后應持之態度」『愛国：愛国女学校校友会年刊』1期、1924年2月。
- (84) 陳華珍「論中国女子婚姻与育兒問題」『新青年』3卷3号、1917年5月1日。
- (85) いずれも『青年雜誌』1卷5号、1916年1月15日に掲載。
- (86) 霍元甲の諸種の伝記とその関係については、韓倚松（John Christopher Hamm）「為《近代俠義英雄伝》中霍元甲之事追根」『蘇州教育学院学报』29卷1号、2012年2月に詳しい。蕭汝霖がいかなる人物であったかは未詳であるが、韓は『拳術』『江湖奇俠伝』の作者向愷然である可能性もあると指摘している。
- (87) このほか、霍が義和団に敵対したエピソードは、義和団を封建的迷信と盲目的排外の象徴とみなしていた陳にとって好都合だったのであろう。陳の義和団に対する考え方は「克林德碑」（『新青年』5卷5号、1918年10月15日）を参照。なお、1920年代半ばには、「我們對於義和団兩個錯誤的觀念」（『嚮導』81期、1924年9月3日）に見えるように、陳の義和団評価は大きく変化した。
- (88) 魯迅「随感録」『新青年』5卷5号、1918年11月15日。
- (89) 陳独秀「随感録 青年体育問題」『新青年』7卷2号、1920年1月1日。
- (90) Andrew D. Morris, *Marrow of the Nation: A History of Sport and Physical Culture in Republican China*, University of California Press, 2004, p. 203.
- (91) 国際化といっても、主として東南アジアの華僑に対してであり、日本の柔道のように、外国人への普及を目指したものではない。
- (92) 程美宝著、新居洋子訳「近代的男性性と民族主義」辛亥革命百周年記念論集編集委員会編『総合研究 辛亥革命』岩波書店、2012年、480頁。
- (93) Andrew D. Morris, *Marrow of the Nation*, p. 225がベンガルとの対比をしている。
- (94) 達人「对症下药」『新民国報』；非非「精武体育会」『天游日報』。いずれも向愷然・陳鉄生・唐豪・盧煒昌編『国技大観』国技学会、1923年（民国叢書編輯委員会編『民国叢書』4編所収）に採録されている。このほか、鄭灼辰・馮蘭皋「勵志団縁起」『精武本紀』（積永信主編『民国国術期刊文献集成』中国書店、2014年所収）や、『国技大観』への序文のうち、精武体育会員の陳鉄生と陳公哲の序文にも「病夫」言説が見える。
- (95) 『近代俠義英雄伝』。「武俠ブーム」については范伯群主編『中国近現代通俗文学史』上巻、江蘇教育出版社、2010年、第2編（徐斯年・劉祥安執筆）；楊瑞松「身体、国家与侠：淺論近代中国民族主義的身体觀和英雄崇拜」『中国文哲研究通訊』10卷3期、2000年9月を参照。
- (96) 「大俠霍元甲」『申報』1925年11月19日。
- (97) ただし、これ以後、霍元甲にまつわる言説で「東方病夫」がまったく使われなくなったわけではない（靈花「南洋游記（三二）」『申報』1930年6月16日など）。
- (98) 極東大会については、拙稿「極東選手権競技大会とYMCA」夫馬進編『中国東アジア外

『交交流史』京都大学学術出版会、2007年3月；拙著『帝国日本とスポーツ』塙書房、2012年を参照。

- (99) 極東大会は北京政府時期に中国が参加したなかで最も大規模な国際競技会だった。中国のオリンピック初参加は1932年を待たねばならない。
- (100) 狄侃「参観遠東運動会記」『復旦』1期、1915年12月。
- (101) 訥「祝中国運動家」『申報』1915年5月23日。
- (102) 「新評二」『新聞報』1915年5月23日。
- (103) 小野信爾『五四運動在日本』汲古書院、2003年、第1章。蕭の文章は拘留中に執筆されたものである。
- (104) 孫安石「極東オリンピックの政治学」（富士ゼロックス小林節太郎記念年金研究助成報告）、1998年、15頁。
- (105) 必危「遠東運動会紀（二）」『申報』1917年5月10日。
- (106) 「演説遠東運動会失敗後之希望」『申報』1917年6月7日。
- (107) Koo Yong Zien, "Athletic Organization in China," *St. John's Echo*, March, 1920. 前稿ではこの文章の作者を沈嗣良としたが、誤りである。
- (108) 吳退庵「論遠東運動会与中国民族体育之關係」『申報』1921年5月2日。
- (109) 吳退庵「中国加入万国運動会之提議」『申報』1921年5月19日。
- (110) 周大啓「敬告我国加入遠東運動大会選手諸君」『申報』1921年6月1日。
- (111) 「国民政府教育方針草案」『民国日報』漢口版、1927年3月1日。
- (112) 張滙蘭「第八屆遠東運動会之女子体育觀」『申報』1927年8月19日。
- (113) 蘇潤璜「我国加入万国足球比賽應注意之幾点」『申報』1926年2月8日。
- (114) 「惠堂對於今冬足球進行之意見」『申報』1926年6月19日。
- (115) 「長沙李奎元帥長來電」『申報』1927年9月27日。
- (116) 林はマニラに生まれ、実業家として活躍するいっぽう、当時はフィリピン中華 YMCA 体育部主任（のち中華 YMCA 会長）として華僑子弟へのバスケットボール普及につとめていた。林は1924年に武昌で開かれた第3回全国運動会にバスケットボールチームを率いて参加、1948年の第7回全国運動会にもフィリピン選手団長として参加している。
- (117) 菲律濱中華青年会籃球隊『扶桑紀游』1927年。同冊子の一部が李潤波主編『中国体育百年図志』中国華僑出版社、2008年、52-55頁に掲載されている。
- (118) 英語版には「sick man」という表現は見あたらない。わずかに中華 YMCA 会長の Tee Han Kee が、富裕な中国人青年の「pale and sickly looking」に言及している。なお、中国人（華僑を含む）のほかにも、フィリピン総督代理ギルモアやフィリピンアマチュア競技連盟会長ケソンら、フィリピン人やアメリカ人も英語の祝辞を寄せている。
- (119) 1921年を画期としたのは、記事数の変化を踏まえてのことである。年間の記事数は、1920年まで4件を越えることはないが、1921年に13件に達し、その後もおおむね5件以上を維持する。
- (120) 蔣湘青「体育欄編輯之趣旨」『教育与人生』1期、1923年10月15日。『教育与人生』は翌年12月に終了した。なお『申報』本紙に体育欄が設置されるのは1926年3月14日である。
- (121) 叔平「記狄雷博士演講（二）」『申報』1921年4月8日。
- (122) 軍人や政治家が自身を「病夫」になぞらえる発言は多いが、これらは「病夫」言説とは言えない。

- (123) 朱芴雲「衛生要言十四則」『申報』1915年9月5日。
- (124) 熱「夫婦之健康与否与家庭幸福之関係」『申報』1921年1月5日。
- (125) 「紀俞鳳賓在江蘇公学演講詞」『申報』1921年1月31日。俞はペンシルヴァニア大学で公衆衛生学を学び、博士号を取得して、1915年に帰国、同年設立の中華医学会幹事に就任した。同仁医院につとめたのち開業、南洋公学の校医も兼任していた。
- (126) 痰敵は1926年5月30日、すなわち五三〇事件一週年の日にも同様の広告を出している。
- (127) 中国第二歴史檔案館編『馮玉祥日記』1冊、江蘇古籍出版社、1992年、67頁。
- (128) 池本淳一「チャイニーズネス構築における対立と困難：民国期武術団体・中央国術館を例に」『日中社会学研究』22号、2014年。張之江が馮玉祥のもとを離れた時期については中国第二歴史檔案館編『馮玉祥日記』2冊、394頁に依拠した。
- (129) 「中央国術館成立大会宣言」中央国術館編『張之江先生国術言論集』中央国術館、1931年、7頁、「国術研究館成立大会」『申報』1928年3月26日。
- (130) 「中央国術館競武場落成典礼宣言」中央国術館編『張之江先生国術言論集』12頁。なお、「中央国術館三週年紀念大会宣言」同前書、27頁では「東方病夫」とする。
- (131) 「武術專家公宴李景林記」『申報』1928年7月29日など。
- (132) 蔣中正「序」『中央国術館彙刊』1928年7月。
- (133) 「転行法令（三）抄発内政部提唱拳技国術令文」『安徽教育行政週刊』1巻13期、1928年6月25日。
- (134) 「国術館発給国考及格証書」『申報』1928年10月23日。
- (135) 「市国術運動大会昨日開幕」『申報』1928年10月28日。
- (136) Andrew D. Morris, *Marrow of the Nation*, p. 214. たとえば上海では、国術館に指定されたのは上海滬北国術研究総社であり、精武体育会ではなかった。
- (137) 金一明「国術全運国考評裁之異同」『申報』1933年10月9日。
- (138) 「中華国貨展覧会」『申報』1928年11月23日；褚民誼『太極操』大東書局、1931年、「自序」など。なお、褚民誼の男性性については、拙稿「探検の客体から探検の主体へ：近代中国の学術界とナショナリズム」石川禎浩編『現代中国文化の深層構造』京都大学人文科学研究所、2015年6月、171頁でも触れた。
- (139) 「全国運動会積極籌備」『申報』1929年7月13日；「西湖全国運動会籌備情形」同8月2日；「体育協進会董事會紀」同8月10日。
- (140) 谷世権『中国体育史』北京体育大学出版社、1997年、273頁；龔飛・梁柱平『中国体育史簡編』西南交通大学出版社、2010年、126頁；王振亜『旧中国体育見聞』人民体育出版社、1987年、148-150頁。
- (141) 「全国運動会積極籌備」『申報』1929年7月13日。
- (142) 全国運動会の名誉会長は蔣介石、会長は戴季陶、副会長は何応欽と張人傑、籌備主任は朱家驊であった。
- (143) 朱家驊「大会之意義」『申報』1930年4月1日。
- (144) 「国府蔣主席訓詞」『申報』1930年4月2日。なお、『申報』によると呉稚暉も挨拶のなかで「東西病夫」（「東亜病夫」の誤植か）という言葉を用いているが、『民国日報』や大会の報告書（全国運動大会辦事処編『全国運動大会総報告』編者刊、1930年）に収録される呉の挨拶文には「病夫」言説は見えない。
- (145) 「紀昨日二十二団体招待選手盛況」『申報』1930年4月14日。



- (146) 「遠東会中華失敗原因」『申報』1930年6月8日。出発前に開かれた歓送会で陳徳徴は「東亜病夫」を持ち出していた（「上海二十四団体歓送遠東選手」『申報』1930年5月14日）。
- (147) 「蔣委員長訓詞」『申報』1930年10月11日。
- (148) 「全国運動会特刊」『申報』1933年10月11日。
- (149) 「何応欽電賀大会盛況」『申報』1933年10月12日。
- (150) 張信孚「全国運動大会之意義」『時事月報』9巻4号、1933年10月1日。
- (151) 尚樹梅「従体育的本旨談到全国運動会的意義」『東方雜誌』30巻20号、1933年10月16日。
- (152) 『体育与救国』中国国民党中央執行委員会宣伝委員会、刊行年不明。本書では序文をはじめ、いくつかの文章で「病夫」「東亜病夫」への言及がある。
- (153) 「選手昨晨謁陵」『申報』1933年10月16日；孫璐「民国全運會研究」博士論文、揚州大学、2014年、106頁。
- (154) 從雲「打破紀錄」的感想『申報』1933年10月18日。
- (155) 「参加世運的目的和希望」『申報』1936年5月9日；古鴻烈「従世運失敗説到全身健康検査」『申報』1936年9月15日。
- (156) Ruth Rogaski, *Hygienic Modernity: Meanings of Health and Disease in Treaty-Port China*, University of California Press, 2004.
- (157) アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート著、水嶋一憲ほか訳『帝国：グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社、2003年、180頁。
- (158) Warwick Anderson, *Colonial Pathologies: American Tropical Medicine, Race, and Hygiene in the Philippines*, Duke University Press, 2006.
- (159) 公衆衛生を管轄する政府部門として内務部衛生司や衛生警察などがあったものの、その職務は限定的で有効に機能していたとはいえない。
- (160) 余世武「弁言」『衛生雜誌』1巻1号、1925年10月。
- (161) 「衛生行政會議」『申報』1928年12月27日。
- (162) 褚民誼「發刊詞」『医藥評論』1巻1号、1929年1月。
- (163) 2件ある禁煙薬の広告も、1930年と1935年に出されており、アヘン政策の変化に見事に一致している。
- (164) 譚世鑫「發刊詞」『防癆雜誌』1巻1号、1934年11月。
- (165) Liping Bu, "Public Health and Modernisation: The First Campaigns in China, 1915-1916," *Social History of Medicine*, vol. 22, no. 2, 2009.
- (166) 「張市長發表開會詞」『衛生月刊』1巻5号、1928年5月。
- (167) 「上海市第十三屆衛生運動大會敬告民衆書」『申報』1934年6月19日。
- (168) 「胡蝶揭幕」『申報』1934年6月23日。
- (169) 新生活運動については、段瑞聰『蔣介石と新生活運動』慶應義塾大学出版会、2006年；深町英夫『身体を躰ける政治：中国国民党的新生活運動』岩波書店、2013年を、また新生活運動と防癆との関係については、雷祥麟「習慣成四維：新生活運動与肺結核防治中的倫理、家庭与身体」『中央研究院近代史研究所集刊』74期、2011年を参照。
- (170) 深町英夫『身体を躰ける政治』21頁。
- (171) 蔣中正「新生活運動之真義」『雲南教育』3巻5・6号、1934年8月31日。
- (172) 「軍政当局昨召各校代表茶話」『申報』1928年5月22日。「五中全会今晨開二次大会」『申報』1928年8月11日も軍事教育と「東方病夫」を結びつけている。軍事訓練の導入について

- は、拙稿「軍隊と社会のはざまで」を参照。
- (173) 「本市学生軍昨総検閲」『申報』1934年6月9日。
- (174) 「上海市公民訓練処成立」『申報』1936年5月9日；「本市公民訓練実施辦法市政府昨公布」同5月14日；「本市公民訓練明日開始」同5月24日；「本市第一期受訓公民昨晨舉行畢業典禮」同8月3日。
- (175) 「第二期受訓公民昨晨舉行畢業典禮」『申報』1934年11月9日。
- (176) 李玉「蔣介石在日記中対日“雪恥”：以1928年“濟案”為中心的考察」『暨南學報』哲学社会科学版、199期、2015年8期。
- (177) 兒童向けのコラムは1933年1月10日に創設された副刊「春秋」の「兒童的樂園」（不定期）にはじまる。同欄は1934年1月に「春秋兒童週刊」となり、1936年1月5日から「兒童專刊」として独立するが、日中戦争の勃発にともない停刊、1938年10月より「兒童週刊」として復活し、1941年12月7日まで刊行された（陳聰『『申報』兒童副刊（1934～1941年）：成人的兒童觀探析』『昆明學院學報』34卷2号、2012年）。
- (178) 陳独秀「抗戰一年」（任建樹・張統模・吳信忠編『陳独秀著作選』3卷、上海人民出版社、1993年所収）。
- (179) 彭德懷講、于鳴鳳記「華北抗戰概況与今後形勢估計（二）」『申報』香港版、1939年1月16日。
- (180) 「擁護參戰國策各界舉行民衆大會」『申報』1943年1月11日。
- (181) 章駿「六三紀念節感言」『申報』1944年6月3日。
- (182) 「六國健兒將爭奪滬市拳擊皇座」『申報』1945年1月14日。1月21日に舉行されるはずだった六か国の選手による試合の結果は報道されなかった。
- (183) 陳儀「閩北體育表演會訓詞」『福建體育通訊』2期、1940年7月15日。
- (184) 仙「國民道德与衛生」『協建月刊』1卷3号、1942年。
- (185) 趙如珩「今後推進體育之基本原則」『華北體育』2卷1号、1942年4月1日。
- (186) 「重慶市體育協進會工作報告書（三十二年度）」（重慶市體育運動委員會・重慶市志總編室編『抗戰時期陪都體育史料』重慶出版社、1989年、41頁）。
- (187) もちろん、これは『申報』に見られる傾向であり、他のメディアにも同じような傾向が見いだせるかどうかはわからない。
- (188) 蘇全有「論“東方病夫”到“東亞病夫”的流變」『求策』2014年6月号。
- (189) 楊非「兩個東亞的醫師」『申報』1938年11月12日。蘇はこの事例を挙げ、その直後に1920年代以前の「東亞」は現在の東アジアより広い地域を指していたと説明している。ほかにも、蔣黙掀「一月來之西亞与非洲」『時事月報』9卷7-12号合訂本（1933年7月-12月）で「中土兩國向称東亞病夫」とする。
- (190) 丁惠康「談談保健醫學」『申報』1936年11月3日；友清「紅豆問談（下）」『申報』1933年6月23日。このほか、「五師昨日國術比賽」『申報』1929年2月17日では、熊式輝が「東亞病夫」、褚民誼が「東方病夫」をそれぞれ挨拶のなかで用いている。
- (191) 「東亞病夫」のペンネームをめぐって、読者の彭思と曾樸の間に興味深いやりとりがなされている（病夫「編者一個忠實的答復」『真美善』1卷4号、1927年12月）。
- (192) 「女子球類比賽」『申報』1928年4月30日。
- (193) 「女青年會組織國術班」『申報』1937年1月21日。
- (194) 孫籌成「悲壯熱烈之婦女救國運動」『申報』1931年10月7日。

(195) 閻振玉「救亡運動中の婦女」『申報』1936年3月8日。

(196) 拙稿「軍隊と社会のはざままで」。

### 【補足】

本稿の原稿を提出した後、張仲民「近代中国“東亜病夫”形象的商業建構与再現政治：以医薬廣告为中心」『史林』2015年4期を得た。本稿とも関連が深いので、ぜひ参照されたい。同論文では筆者の前稿「「東亜病夫」とスポーツ」に対して批判がなされている。これらの批判の多くは本稿で解決されていると信じるが、誤解を生じそうな点について具体的に応答したい。

張批判の多くは前稿の誤読と男性性に対する誤解・無理解から生じている。まず前者についていうと、前稿でスポーツと男性性を結びつけ、体育鍛錬の欠如が男性性の欠如であると見なしたことに對して、張氏は「研究者が一部を以て全体を説明した想像、あるいはのちの概念によって誤った方向に導かれた結果」と批判する。しかし筆者は前稿で「近代中国の知識人にとって、身体の鍛錬は男性性回復の主要な手段となることはなかった」（前稿332頁）とわざわざ断っており、男性性の問題でスポーツを特別視しているわけではない。

男性性とは社会的規範であり、個々人がその規範に對処する過程である。男性性は男性に備わる本質的なものではなく、他者との関係性のなかで構築される。また、男性性は生物学的な性とは區別される。したがって、「当時の女性も男性性を欠如していたのか」というような張氏の批判は的を外している。ただし、これには中国語の訳語を「男性特質」としたことが関係しているかもしれない。この訳語は張穎、王政の提言に從ったものだが（張穎、王政主編『男性研究：Masculinity Studies』上海三聯書店、2012年の「前言」）、「特質」という言葉は本質を想起させる危険がある。

男性性はのちの概念で、西洋とインドの経験に由来し、近代中国の状況に必ずしも適合しないという批判は、分析対象と分析概念を取り違えているのではないだろうか。しかも筆者は「中国は完全な植民地でない以上、コロニアル・マスキュリティは不完全な形でしか成立しない」（前稿323頁）と断っている。このように批判する張氏自身、「再現政治（the politics of representation）」のようなのちの概念を使っているが、このことに矛盾を感じないのだろうか。

中国人自身が男性性を欠如していると考えていたような当時の史料を見いだせないという批判に対しては、張氏自身が同じページに掲げている図1をよく見ていただきたいと答えておこう。また、当時の中国の男性は男性性を欠如していたどころか、「男性的話語霸

権」と「自我東方主義想像」に満ちていたという批判については、男性性は関係概念であることを指摘するだけで十分だろう。

逆に筆者が張論文に疑問に感じるのは、中国化した「病夫」言説の歴史性を考慮していない点である。『申報』の「病夫」広告が時代的に顕著な偏りがあることは本稿で示したが、このような変化にほとんど注意が払われていない。また、広告だけから「東亜病夫」イメージを語ることの問題もある。

最後に、医薬品の広告でも肯定的文脈で使われているものがあることを指摘しておこう。1930年12月28日の『申報』に掲載された「誰説中国人是東亜病夫」である。この広告は、上海の万国競走大会を踏まえている。同大会に中国人の参加が許されたのは1924年で、1928年から1933年に廃止されるまでの間、中国は団体で6連勝、個人で5回の優勝を飾っていた。皮肉なことに、この広告によれば、中国が「東亜病夫」を克服できたのは、外国産の滋養強壯薬のおかげであった。